

丙子雜俎

七

昭和十一年六月中浣起筆

特別
14
1919
478







五國分寺瓦文字（壹）







無理である、鬼のまにまに著書七鬼門説のまんぢうが  
るゝことを感ぜざるを得ない。

○前と及洋難と就七脚の書いて見れば書き漏らしたこ  
ととアット、ランドムと書いて追神さま

同じ原書と譯しを譯するに依りて全く面目が變り、宛が  
りら原書が異なるとか思はれることがある、自今のはつと  
あつて例の例の例のマツベスと譯すが前と譯し違ひ  
後と譯した、試やマツベス夫人の物語の意を讀み  
くらべて見ればことがあつた、然るに日英のつとむる一語  
を譯しることがある、大体の白じとあつても著者あつて  
味の全然異なるのである、自今が原書に依りて英譯させ  
ること、和文を直に英譯するにこそさういふことがあるがいつて


此處の比喩もあるが如く感じ、まんと漢人がえんも一語  
異なるべし感がある、この為に見言書の異なるべしである。  
譯本と原本の間の感元より隔たりのがあるのことにいひて  
あつて。




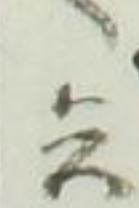
いつてや西洋の例も人に譯させればあつた、政海大教  
の時の文章のゆゑ、譯文の一字一句が宛ら出でてくる  
言ひもある、譯文をいふと、まんがさうも出てくる、  
と不着と思つれば、譯者のアライスの語を解く得ぬ  
つとあつた、何うの體に誤訳の笑話を出して  
長比が、アノセント十世を Innocent X とあつてあ  
つた、と、マセリヌトマスの譯文をみる、クライスト  
と早やのまにまに、無邪氣うらうくりすと譯してら



この会に入りて誤譯に羅馬法皇の名をいふ譯字は困る併しエント誤譯に決して論くべき。

ちよ人の田園生活の書も及譯す。百姓の言葉を日本の百姓のナマリノ多し信州備後あやうのよきあひ及譯し、其の上風の強きこと、多し信州備後あやうの方言を及譯の方此をよしと一般、誰れも分らざるのひと敗した例もある。いくら宮室がよかるとして、地方をまき、まき揮り回すこと、感心が出来ぬ。

上田敏の上乗の譯書と云ふんれが志が、其の山人がよきとを并置してあるん及して、批評家、其の譯をよきと上田流れと云ふん、上田の及譯が、うまいと云ふて、人の言を指して辱けん例を見え、 仰き見るとよきやうなる及譯

と云うて、見ぬ、と譯し、教う、あやうなる、即ち、善い、ば、よき、を、名乗る、を、上げ、よき、と、譯し、の、う、ま、い、と、褒、め、て、ある、が、よ、う、日、本、の、そ、う、を、 意、ゆ、し、て、ある、所、に、移、す、オ、ハ、あ、る、が、志、が、し、え、な、や、う、日、本、化、し、あ、る、が、創、心、が、加、い、つ、て、ある、と、譯、す、こと、が、本、意、が、あ、ら、う、徳、の、心、の、或、つ、て、よ、き、り、に、及、ゆ、る、漢、や、支、那、の、昔、の、流、を、 和、譯、す、こと、が、流、行、し、て、田、原、冠、山、と、い、ひ、其、の、尤、も、よ、き、あ、ら、う、が、上、田、敏、成、の、向、月、物、致、す、 支、那、の、お、話、の、漢、譯、が、あ、ら、う、と、い、ふ、漢、文、が、見、え、て、及、譯、と、い、思、い、ん、が、る、又、よ、き、と、較、べ、て、見、て、よ、秋、成、の、文、の、方、が、優、り、て、ある、と、い、ふ、い、及、譯、と、い、云、く、 譯、者、の、創、心、が、よ、う、と、成、切、し、よ、と、見、ぬ、は、る、と、い、ふ、及、譯、の、原、意、が、い、ろ、く、の、程、が、あ、ら、う、と、外、人、が、日、本、の、う、を、



書いた耶蘇教徒の起り類も、さういふところの書き方  
いかう、人名地名も、さういふかあり、觀察の誤りも  
がある。そんなと他と、於て譯するに、敢て行ふを  
すし、その外、如んか、日本に、之を譯する、場合の誤り  
や、さういふ、相違、注脚を加へ、又、實があつて、免れ  
ると、さういふ、面倒、探り、さういふ、ことがあつて、其の、元  
への、為め、筆を、投して、多くの、日を、費す、こと、がある、こゝも、亦、及  
譯、又、就、この、一、厄、がある。

版口大早の、多くの、友、譯を、やつて、ある、に、け、れ、其の、所、感、が、あ  
を得て、其の、彼、の、云、く、原書、の、紙、譯、ある、こと、に、た、だ、一、面、の  
陥、弁、以、外の、何、れ、の、さ、う、い、ふ、彼、の、中、を、校、き、足、さ、う、い、ふ、  
然、も、隔、か、つ、隔、か、つ、歩、き、廻、ら、う、け、ん、が、る、ら、う、い、ふ、た、と、

及譯とよ、よ、の、歴、史的、の、さ、う、い、ふ、口、真、似、である、他人の、い、ふ、こ、と  
を、その、つ、くり、似、て、さ、う、い、ふ、こ、と、に、難、点、が、あ、り、原、書、者、さ、う、い、ふ、つ、の  
筆、癖、が、あ、つ、て、際、限、さ、う、い、ふ、さ、う、い、ふ、こ、と、に、あ、つ、て、留、め、の、ふ、か、り  
い、ふ、か、あ、り、~~原書~~、~~を~~、一、氣、の、譯、さ、さ、う、い、ふ、さ、う、い、ふ、譯、さ、さ、う、い、ふ、  
あ、つ、つ、い、の、隨、分、心、家、さ、う、い、ふ、眼、海、の、筆、を、弄、し、自、分、の、こ  
時、を、弄、さ、さ、う、い、ふ、分、り、さ、う、い、ふ、又、を、弄、さ、さ、う、い、ふ、人、も、あ、る、及、譯、者、の、務、め、を、  
其の、筆、癖、ま、つ、つ、つ、移、す、こ、と、に、及、譯、者、を、鵝、鴨、と、い、ふ、  
才、と、い、ふ、が、無、理、の、沙、汰、である、コ、ン、ナ、の、あ、つ、て、忠、實、な、譯、し  
た、と、い、ふ、譯、さ、さ、う、い、ふ、こ、と、の、さ、う、い、ふ、さ、う、い、ふ、人、の、及、譯  
書、を、讀、む、こ、と、を、送、還、さ、う、い、ふ、こ、と、に、似、て、い、ふ、か、あ、る、  
及、譯、者、の、往、り、原、文、に、拘、泥、を、し、る、者、の、神、髓、を、さ、う、い、ふ、こ、と、を、送、  
還、さ、さ、う、い、ふ、人、が、あ、る、こ、ん、な、つ、つ、い、ふ、方、便、の、あ、る、か、併、し、後、者、の、さ、う、い、ふ、







のりあり、何人七澤し得るの事を澤せんとする功名心か、や  
るよもあらず、世界の大家と名を列するを光栄とすし  
てやるものもあらず、まゐりさましくあつたが、中々苦痛を  
感するものばかりである。衆人の評してゐるものもある。表  
公はつて敢て澤料を願ふ事を或年もあつたものもあるが、  
これに絶然其れ少くも。

ある時代より西洋の文物をとり入るゝことが急ぐ役官者も  
此種の友澤をこそせよとあるが、まゐりさましくあつたが、  
せんずく埋没せしめられたるが、外國語に通ずるものもあつた  
きつて一も二も澤二も三も反澤の可成りいふに依るに、  
在免かんば、今の元元西園寺公の自ら手かければ、どう  
か知らんが、法濟の那翁傳を反澤し、お流天の皇の獻

藤原

説と供したるものがある。公が自内政の中心人、徳大寺を  
古より退社と強くして生活費を得、以て反澤  
れと導せんが、私の先夫が宮内省に奉仕してゐた頃  
公の澤務を澤言するものが、毎日の仕事に数年かゝつた  
まゝに、取説の罪状を、欄心に「富春」の二字のあつた  
れことを記し置いた。

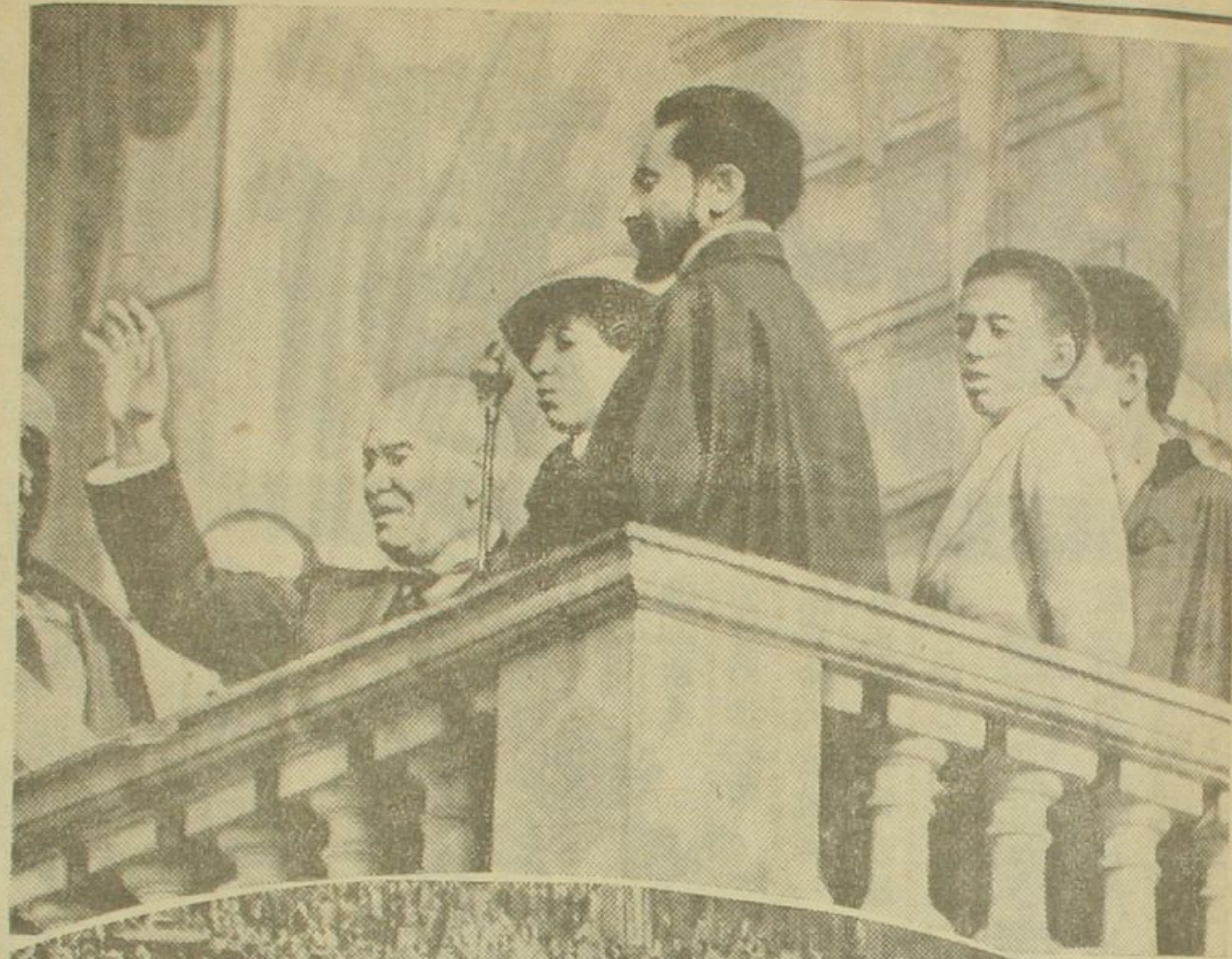
吾々が東京大宮に、まゐりさましくあつた漢文の先生より、中村敬亭公  
が詩経を支持して居るものがある。そのまゝの詩経を、  
すゝめざるものもあつた。誦讀するものもあつた。支那の  
まゐりさましくあつた。幸ひ●詩経を英譯し、支那  
の出版書があるから、毎詩君等、英譯をこころに誦  
讀せんよとあつた。まゐりさましくあつた。先生の支那言の朗







ロンドン御到着のエチオピア皇帝



(上)六月三日ロンドン御到着の夜、英國公使館ハルコニーから群衆に挨拶をされるエチオピア皇帝御一家(下)同日ウオーターローから宿舎に向はせられるエチオピア皇帝を出迎へる人出り中央の自動車は皇帝の車、福岡より本社電送

書きさるゝ、勿論せん、及譯ひる。俄塞き、大船目勝  
千のことを書き、故く、此等、勿論、志林の材料、皆、瘡紙とす、  
たのむ、あつた、人、追憶、慙汗、至極、

の敬、皇の、エチオピア、皇、龍、命、此、回、  
ロンドン、在、工、四、公、使、館、の、ハ、ル、コ、ニ、ー、に、於、て、英、國、氏、族、  
の、哀、傷、的、回、憶、の、事、也。回、亡、び、て、自、公、使、館、を、在、り、  
皇、帝、に、退、位、せ、ら、れ、工、四、に、就、き、皇、帝、の、有、り、あ、る、心、も、  
洵、に、悲、し、く、し、國、際、聯、合、の、依、頼、す、る、事、も、今、更、に、  
あ、ま、り、し、く、伊、國、に、割、裁、を、加、へ、る、事、も、一、聯、合、を、リ、ト、す、る、英、  
國、一、方、に、對、し、強、張、つ、て、見、え、ら、れ、た、事、も、又、一、敗、を、白、

藤田
















の近代橋、以て長橋が何となく、新橋に在るの思ひか、此の  
東京の都の繁華を、いさゝか、自今、此地を才一と推して、  
而の、これ、降る時の詠め、又、いさゝか、いさゝか、と想像  
一、此、河、流、る、り、干、涸、る、り、少、く、早、か、つ、た、上、野、の、原  
樂、も、字、つ、た、い、ん、熱、海、の、極、を、を、使、つ、つ、り、取、東、京  
と名を改め、此、河、増、築、す、り、此、如、此、河、二、即、の、注、を、  
係、り、し、る、り、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、り、空、突、後、神、田、合、本、目、を、  
そ、り、~~し~~、~~て~~、~~成~~、~~り~~、~~し~~、~~る~~、~~り~~、相、南、の、力、も、あ、り、自、今、  
河、の、河、に、あ、る、り、一、寸、字、つ、つ、る、り、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
住、地、の、昔、一、雁、路、の、あ、つ、た、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
河、の、停、車、場、も、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
づ、五、階、上、つ、た、が、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  


と、此、河、流、水、す、り、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
橋、の、方、に、東、台、と、区、敷、す、り、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
建、築、物、が、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
の、河、に、来、り、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
東、京、と、高、安、と、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
と、丁、が、相、對、し、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
と、男、的、の、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
と、専、ら、し、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
と、専、ら、し、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
特、も、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
此、者、も、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、  
之、の、~~河~~、~~増~~、~~築~~、~~す~~、











# 食日の望待ぞふけ

中集に點一眼の界世

## 大空の黒ダイヤ奪取 日本部隊に凱歌上る

和

### 女満別の観測成功

【札幌電話】世界の科學者待望の日食はきた、十九日朝イタリーの南地中海から始まり、黒影は毎秒一キロの猛スピードでギリシヤ、トルコ、黒海、シベリヤ中央部を東へ東へと進み、瀟灑國境の北端をかすめて沿海州から我が國土に上陸、北海道北部岨嶽三百キロにわたる海岸線に不気味な暗黒の影を投げて太平洋に去つた、我等の太陽は黒衣を着せられるとも知らず、愚の運行を續けてゐる時、地上には觀測最適地と選ばれた北海道の中頓別、枝幸、雄武、紋別、女満別、上斜里各地に日、英、米、支、印、露、チエツコ、ポーランド各國の學者達が「たつた二分間の太陽」を捕へんとして参集、レンズと網膜のオリムピックのために月余の努力を傾けたのだが、瞬間黄金の天候は？……十九日早朝から北の科學地帯には悲喜の聲が交々、外國陣上斜里は惜しくも不成功日本陣女満別は一時懸念されたが貴重な瞬間には「晴れた成功だ」と奮興する、北海の孤島利尻の觀測隊からは「快晴……成功……真鍮一の歡喜、文字通り天にまかせた科學オリムピックの勝敗は如何なるレコードを記録するか？【寫眞はけふ銀座の觀測隊】

【女満別特派員發】十九日午後三時二十一分卅六秒、絶好の日食日和に悪まれて干切れ雲を離れた太陽は眞黒に覆面もう地上には、鉛色のにぶい光が降つてゐるだけで、神秘的なコロナの傍には星が白く輝いてみえる、地上には鶏の鳴く聲、バナナ糖を被つた早乙女博士がアイシニタイン・カメラにしがみついて二分間の暗の成功を泣かんに喜んでゐる、色ガラスを持つてこの學者陣を遠巻きに集まつたアマチニア觀測者達はこの瞬間ガラスも捨てたコロナの不可思議な色で光に茫然、觀測成功を我がことのやうに喜んでゐた



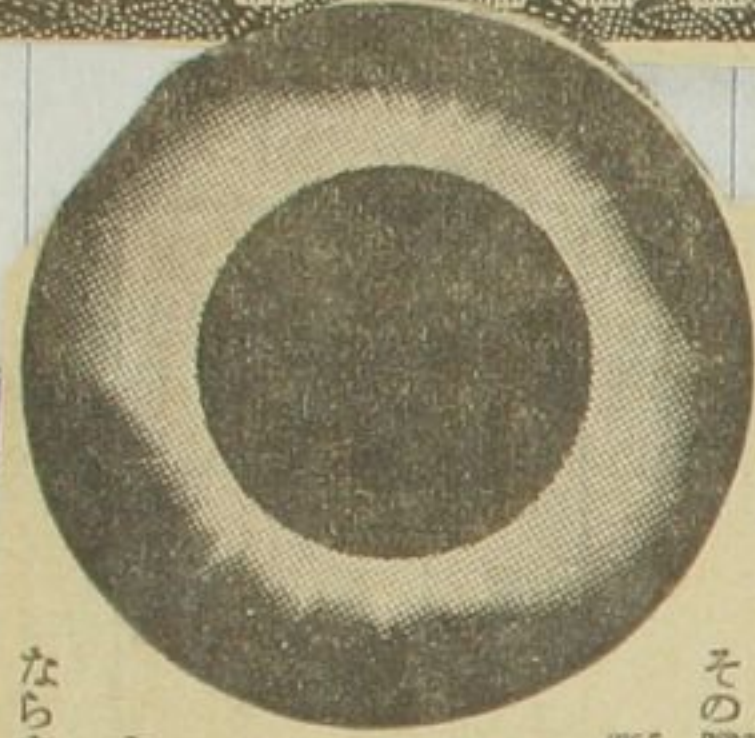




# 滅明の瞬一・ナロコ

ふ震騰心の

陣學科界世



## 深夜まで星の観測に

【女満別にて齋藤特派員發】 露面太陽指の科學聖職は終つた、當日女満別の早乙女博士では望遠鏡の周囲に紅白の幕を張りめぐらし全く観衆とは没交渉に難かしい機械類に最後の點檢を與へた、露帳を済ますと休む暇もなく又望遠鏡の傍に引き返した早乙女博士は同じ幕の内を観測する吉田技師とジョンソン教授を顧みて白雲去來する大空を見上げる、露度か日食を見て幾度か舌の根を味はつてゐる博士は今頭上を蔽ふ白雲が死か其度胸を試す白刃に見えたのか、ニヤリと笑つてまた望遠鏡の度を合せる、午後三時着白い無氣味な光に閉された地上から、鶏の聲が聞えた、あゝ盛んに鳴いてゐますなあ」と落着いていゝ、目をあげれば千切つた直線の標な白雲は太陽の右に飛んで全く晴れ渡つた青空に三日月形の大陽が悠々と光を投げて居る、望遠鏡の星根の下からは時を告げるラジオのシグナルが聞えて来る、時計もコックと音をたてゝゐる、ジョンソン氏も吉田技師もあたりを省みる暇もなく望遠鏡を見つめてゐる、其時サツと影が来た、赤いボールの球面が消えると陸軍のマークの標なコロナが美しい光をあたりに放つて大空に懸つて居る、たどんの形の直ぐそばは赤くその外側は黄色くなり外側に行くに従つて蒼白い光と變つてゐる、その圓りを取替へる群、青い空に浮ぶこの壯觀全く聲を立てることも出来ない思つまつた瞬間博士は素早く望遠鏡のシャッターを切つた、一刻萬金の空は晴れて果てしなくその暗黒が成功したかどうかは少くとも十日後でなくては分らないのだ、観測に成功した早乙女博士は觀衆の歡呼に應へたり小學生の旗行列に挨拶したり仕事が終わるまでなかなか忙しくキヤムプの周りを回つたり來たりしてゐたが周囲のテントの片付けも終つて群衆も去り始めると小屋の中で朋友觀測地の標を聞くべくラジオのスイツチをひねつた、上斜里では生憎日食直前に雲が出たと聞いて博士は語る「ストラットン博士はお氣の毒でした、遙々見えたのに、私の方も完全だつたとはいへないかも知れぬが兎に角部分食を合せて十五、六枚の寫眞を撮りました、此處の水は硬いから直ぐ現像して見ようか、止めにしようかと考へて居るところです、大分疲れましたよ、今朝の四時からお客さんがあつたので——然し今晚もこれから星の寫眞を撮らなければならぬからまだ頑張ります」

## ス博士はお氣の毒 雲を怨む早乙女博士

ちま相

ものは總てコロナと稱する太陽の一番外側の部分を特に観測しようとしてゐたのである、その結果雲の邪魔するところとなつてわれ／＼コロナの寫眞撮影

### 本社映畫班

### 大成功

興部で日食 映畫を撮影  
【興部特派員發】 興部の本社映畫班は晴天に恵まれトキキによる日食の劃期的映畫撮影に成功した

並にコロナ観測は全部失敗に歸したことはまことに遺憾の極みである、但しロイズ博士はその研究が成功したことを信じ、まことに喜ばしい次第である、ブラ

ツシユスペクトルの観測の二三のものも成功したものと思はれ、これも私の喜びである、終りに今回の研究にあたり始終われわれ一行に對して温かい心の援助を與へて下さつた上斜里の

### トモ

マチに對して心からの感謝の意を表する、私は小学校児童をも含んだ此トモマチに上つたとひ僻村に住ぶとも日本人が如何に學問的研究に對し獸身の努力を捧げる國民であるかを知らされたことを感謝する次第である

### 各觀測班の成績

利尻島 (神戸海洋氣象台)	下湧別 (廣島文理大) 失敗
成功	津別 (唯一人觀測に當る)
稚内 (京大長谷川班と科學博物館鈴木班) 成功	ボーランド班) 失敗
中頓別 (東京天文台樺本班)	女満別 (東大早乙女班、アマリカ班) 成功 (飛行天文台)
京大小山班、チエツコ班)	失敗
成功	日進農場 (東天開口班、今道班) 失敗
枝幸 (京都花山天文台班)	編走 (東京文理大小野班)
と中華民國民班) 稍成功	成功
雄武 (京大上田班) 成功	清水 (東北帝大松隈班及)
興部 (水澤緯度觀測所山崎技師を首班とする本社映畫班) 成功	ひ地電流の加藤班) 成功
紋別 (東京天文台班、東大天文學教室班) 成功	上斜里 (最大の觀測隊ケンブリッジ班) 失敗
	斜里 (理研仁科班) 成功



の自余拍子に師友と追憶し、隨筆早稲田の収入に  
其數ハ八十餘人と及んぬが、皆早大の教職を  
務めたりと限り、早大出身の自余の懇親の關係  
が、ありとも、教職の關係のもの、一切の有りてある、  
此頃、關に乗して往くの人と追憶し、ある前後、亦、  
平伯の追憶を考へれば、早稲田出身で、現存してあり、  
京都の大丸生服店、主人下村大丸、と、いふ、  
關係があるから、暫く思ひ出と考へて置きたら、と思  
ふ、大丸屋の或る年、から、傍くの家で、徳の時代から  
其時、江戸に、雄視し、其の妻、其の代、の、今、  
又、ふ、と、い、が、時、運、が、推、移、と、考、へ、る、大、家  
と、異、特、修、が、あ、つ、う、と、大、丸、七、終、と、運、陣、と、關、西



と、運、陣、と、う、の、に、あ、る、ま、に、利、つ、れ、店、主、は、早、大、の、高、科  
と、入、り、中、親、父、が、強、し、に、年、若、い、大、丸、と、い、ふ、途、中、  
其、業、と、痛、し、と、家、業、に、身、を、委、ね、る、事、も、あ、る、こ、と、と、  
考、へ、る、ま、に、の、江、日、末、に、い、ふ、の、に、う、。、正、大、丸、の、退、き  
後、も、さ、う、く、西、洋、の、日、量、の、視、察、を、出、し、た、。、自、分、の  
大、丸、の、何、ん、の、關、係、も、さ、う、在、る、中、の、正、大、丸、と、一、冊、  
遇、つ、れ、こ、と、無、つ、れ、が、正、大、丸、の、洋、行、中、大、丸、の、店、が  
日、一、日、表、徴、し、て、種、々、の、悪、評、が、耳、に、入、つ、た、。、回、家、の  
重、ん、ず、る、自、分、の、痛、ま、し、い、感、が、起、つ、た、。、其、時、東、京、の、店  
の、住、者、と、共、つ、つ、て、お、れ、る、後、は、身、を、委、ね、其、時、の、社、長  
と、さ、う、に、杉、山、義、雄、に、死、人、の、形、の、弟、田、の、お、れ、の、支、店  
の、支、店、長、の、さ、う、な、像、國、の、さ、う、な、大、丸、に、入、つ、た、。







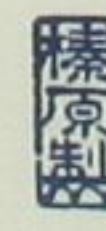








別荘田もよく切つて居り、此別荘に七と應司家のもの  
あり、これに云ん、金盛の別荘をまつた寺の附り、あつても、  
も地形のおもしろい所を建て、根柢敷き、深きに建て  
ん、其地形がゆるまる面白いの、嘗て、この西をみれば、  
七ある、大隈屋の地付、この遊む、八瀬水原の跡を  
又、これ七ある、大丸の花を、金部早稲田、字野原と  
云つて、いひ、花を、入つて、田舎の検査を行ふ、こともあ  
流石に、古くからの大富豪が、此家が、出版、これ漢志七あ  
つた、さう、さう、多数の花が、殊、感心、これ、支那各  
地の地法が、金部、摘つて、みれば、これ、昔、さう、さう、  
を、揃へ、これ、感心、する、これ、共、い、是、昔、持、申、受け、  
て、早稲田の文庫、移、これ、他、此、跋、花、と、重、複、する



よか、多い、の、昔、い、言、は、さ、う、で、さ、う、  
台、は、い、早、稲、田、の、移、これ、さ、う、さ、う、

下村の店の裏に、大隈屋の庇陰、  
二、三、の、金、部、早、稲、田、の、  
次の入口、  
の、地、法、が、  
る、け、ん、の、  
あ、つ、て、  
い、ろ、の、  
し、ん、の、  
た、う、い、








予の逸業、新山陽一八漸やく發行せられた。出版部から  
出され此考ハ三六版の七冊、以後部ハ割合々多く後  
親ニ不便ありしゆ、今方ハ四六版ニ改め、頁數六五  
とすつ也。亦七版の時改ニ卷尾ニ補遺ハ數十頁  
あつたが、今方ハ更々他ノ逸業ニ加められたる山  
陽ノ圖ニするも、卷尾ニ附したる、全部ノ附録  
が百頁を越へた。和田若菜ニ内田景が社考を  
批評し、此考ニ附し、卷首のウラ  
ニ徒筆の史論行本、西省松の詩話、高橋玄仙  
花の家歴記并ニ家歴の圖七幅、此の相南の  
厚みのしるが、未だ、之人を改訂版として、其の  
才八版せらる。 (候三回)



の畫家神樂江卷石といふ可きもの文があつたが、京都の  
福鶴といふから、遂に今方より、核を得、時と方、前の後  
往き、此ハ四五年前中、忘に罹つたとす、人として後、善行  
を絶つたが、此の補報に接し、卷名にあらう、その  
死亡の事、くも、自ら記し、く、其の印刷物  
が郵送せられた。京都有志者の名が附記に伝つた、  
此年四月、山形、お酒の、本、有、家、病、集、野  
美、中、井、先、月、三、十、永、眠、し、此、と、ある、卷、名、の、跋、に、  
生前洛西住吉山、墓を、お、人、い、あ、る、裏、の、卷、名、に、  
ん、し、強、し、愛、人、か、ま、の、か、り、梅、枝、と、漸、絶、す、と、い、  
を、自、筆、の、注、釋、に、記、し、て、ある、彼、ん、お、あ、ら、う、の、思、  
ひ、あ、つ、た、が、自、筆、の、補、報、に、其、人、か、れ、方、野、村、す、と、い、



其の汗報の印刷あり此の冊子の終りよ收めをわく(六月廿四日)

○中央に論七月邦の所記二冊の訳が添いつてある。  
佛人ルチ・デューグ *Lucie Douglis* の名を以て譯し  
ルチの日出る國と名しとあるに二二二六事件  
の起る一過る前に著しれたことか、跡とせんてあるが  
何れもあつた事件の動機を前記したる如く思つて  
ふしもある。然しと露境に出征してつる日本軍の生  
活や行動を細く記してあるとあるが、小説と思はれ  
るいふいふある、此心あるかつて日をく来たことある  
湯島のふたつともある所から、其敘るは外人  
思ふよふ所があつても、こゝ興味もあるが、  


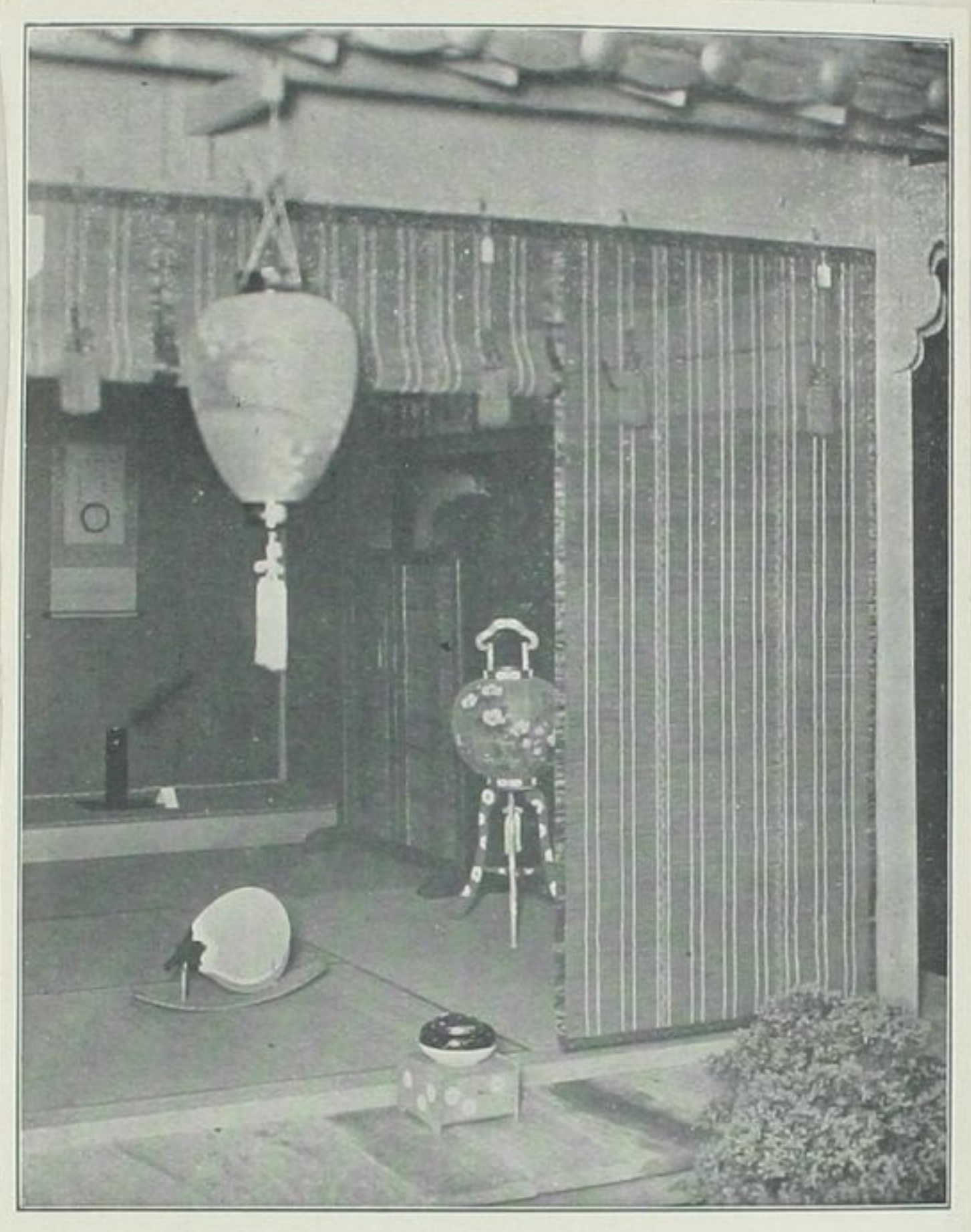
七よか多くつて、いろいろの想像が湧く、別巻におせり  
る如く、我々を全不の公利を許さるゝといふが  
あつた。時夜草一丸〇〇頁と後〇一丸。二月廿  
四日

○文藝春秋社から八月邦の誌葉の寄附を  
囑りし、其の思ふ五別を以て送つた。其の函宛を  
江東中村橋と改題あるが、その時初めて首  
尾陸三に今も此流、大隈侯の生處、早川中五  
三今も此流、此男に何の構程の記分が自分か、  
知つた、  
其の教を公か可医を付せ、  
其の二十年前、漢号、其の日記の事か、  
後、



次中伯が大同回航の為り新島に未だ時自らが對抗し此の  
 危殆の身こそ迫つた。其處社の操符者本が自  
 己を擁護し此の無難があつたが此より自らが自向の  
 著「福の事体」に及ぶと其時「時」を  
 といふ事と「後」をいふ事と自らが自向の  
 といふ事とが如く此の北の海に及ぶ事と自向の家が固  
 然業をやつた頃の船頭が味方しての私を（即ち）  
 此の流をいふ事と書き及ぶ事とが自向の事（即ち）をいふ事  
 との事とをいふ事と「ある」の解（即ち）をいふ事とをい  
 へる。

○夏終り入ると毎年旅ののちを思い出す。今も  
 境より山河の故郷に連ねて来る。旅の大きき



である。時とて山  
 懐きとありし時分  
 又旅をいふことと  
 懐き見れば昔から  
 可憂ふあり旅をさ  
 せしとてありしわが  
 昔の旅の相中つ  
 らいよむあつたが  
 んが一程の硬教育

じつとつた。自分がよく旅の初めの頃、十年丹是  
 の祖父に伴つて上つた。其時、今昔を中へ六  
 日程と累ねて来る。其時、旅の初めの頃、十年丹是



感はるゝうれが乗物かまゝの草紙に掛かると、おん  
が不完全な街道、橋や中を渡る、浴し、おん冷風  
の病を起し、夜ん道をひきつて二里を歩か  
し他の驛に名をせしめたり。乗合船と舟司詰り  
と窮屋を感ぜしむる、さすの、さすの、さすの、  
印つておちり、さすの、道中の難儀を、いこん、  
かと、さすの、さすの、さすの、さすの、  
と、さすの、さすの、さすの、さすの、  
東海<sup>道</sup> 中山道 甲州街道 四半日踏破、  
時のあつた。今、さすの、さすの、  
い北旅のあつたと思ふ。旅費、さすの、  
同伴を得ることある。自分、北の旅の同伴、  
山

このおれ、さが、誠、社会、あつたと思ふ、つ、山、の、家、と、  
て、年、半、の、四、五、日、を、さすの、さすの、  
つて、他、今、世、故、こ、さすの、さすの、  
あ、さすの、さすの、さすの、さすの、  
長、脚、の、美、里、さすの、さすの、  
日、和、不、敷、む、さすの、さすの、  
た、酒、が、あ、つた、さすの、さすの、  
月、心、深、い、つた、さすの、さすの、  
無、つた、さすの、さすの、  
日、互、ひ、く、さすの、さすの、  
さすの、さすの、さすの、さすの、  
合、が、出、た、さすの、さすの、











田とゆふ比多の道に接して田●二玉のち候似たる  
を名づく云ふルが此所向は馬馬康く一かつた遠城方面  
の田畝の井然たるを見て此の所は其の北に於て積穂  
村の稲も二玉の道に田のありしはありし。要す  
るに此四十日の旅行は自分より有差する終ふ旅  
行であつたが今考へしに汗と流しと支の道と  
踏破するの心無かあり七何を得た所のまゝであら  
今の終を誇りの栄利はの得た所のまゝであら  
い、平等の道は難くありしはなり。必ず先輔  
道す者その人を得たのんわらふこと、心心く車馬車馬  
●之友を恨んば感懐を培くものがある。(六月廿四日録)  
自分の愛め旅行は四十日と涉つた。生涯にえん不どの

田

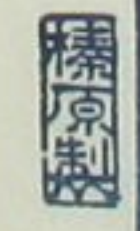
田敷を要し連続旅行のまゝである。四十日旅  
り道して途やから戻つたやうなこの無さうな  
旅道す者の賜と云ふもの。まづい人生の行路と  
といふものも年期にこゝろの旅をして日と異  
るゝれれと接し、冬に異る人伝ふ觸れぬの人生  
と理解する。数能心あつた相違する。前も  
平ふること。毎の一人の日費一田を旅ののまゝと  
申合ひせむ。車馬賃も必要としたら一日一人一  
田の旅費としておきかぬ。其次の旅舎と行  
賃と然しとあつた時があつた。驛飲する雲助かみ  
た。胡麻の反りぬた道剥きもあつた。志か一切を  
九等の厄に罹らうとつた。有りあつた。自分







ふは合ふ終世健康を保つに。自らの身の以實物を解  
さうらうに。富山の桐茶が無くも一刻七田のまのあ  
このん、浅間登山の途甲マウチが茶火を。心か  
リま窮したことも思ひ出さ。自らの酒をく。旅か出  
来直らうらに。北の酒の改良前が。鮮出さる赤を  
を帯いたエゲ真の酒を幸抱し。口に入れたものだ。  
木登の浦島の伝説のち。猪ごめの里。泊した時。懇  
譚を。酔んべら。ンダ。自合い。痛飲し。前後  
七。おと。酔倒した。幸い。酒。山。自合の  
身辺の。始末。あつた。旅。を  
失。人。思。出。先。の。流。千。は  
梅。の。午。浦。又。主。の。と。注。又。七。も



い。の。八。珍。を。つ。は。は。の。飲。本  
か。席。侍。つ。自。を。飲。を。思。つ。か。ん。中。身。こ。ん。は。恐  
縮。れ。五。の。割。り。放。事。も。此。午。め。し。て。清。あ。く。せ。て。こ  
を。得。う。う。れ。前。日。林。友。幸。つ。吉。時。の。内。務。次。官。が  
来。つ。茶。と。丹。を。し。れ。り。外。ん。れ。を。ま。ん。を。あ。て。こ  
ハ。ん。れ。を。あ。つ。れ。れ。を。い。ま。以。故。程。風。儀。か。こ。う。と  
飲。為。せ。い。息。七。け。ぬ。裸。体。の。意。か。く。又。く。り  
別。室。に。時。を。挑。む。態度。を。あ。ら。し。め。う。し。て。る  
ル。の。一。滴。を。危。険。し。し。て。勿。ろ。ま。ま。う。れ。清。和  
不。悔。候。の。ち。も。あ。つ。れ。甲。州。め。を。託。し。ゆ。あ。す  
う。れ。る。市。疲。か。東。京。の。及。ん。心。と。ま。ふ。時。を。さ  
へ。の。い。ふ。佛。塔。を。撤。す。時。塔。下。の。茶。を。大



















































を得し、漸やくてうらにやうな気がする、昔都のさあじ  
あまがゆふ侍尊に、私ともふのむ、人に今ゆせしむ  
う能がある。まは降のえ吹の法延と臨人む時、又佛法  
と聴てゐるが、自分の新法をまけるし、また又換  
合を得るまい、あの人、佛法をうらむ、うらむ、あうら  
と思ふ、只のう聴て、自分の疑義を解したのと思  
ふとある。

自分の友人の皆、宗教と冷淡い、高田の洋のり、時、  
漢より、太平洋の教の口をきく、初め、宗教親  
念か、備した、何れの法、たことかある。保し、家  
庭、このつて、仏教的な念、佛を唱くる人があつた、あ  
の異次、うらむ、あうら、珠教を懐中してある。

たかしの乳、夜の時、め、う、珠教を懐中する、  
ことか例とらう、をみる、さう、さう、ことか、あ、心、を、  
得、さう、と、法、つ、れ、が、然、家、び、い、あ、う、  
う、も、珠、教、を、持、ち、を、お、る、時、又、珠、教、を、家、に、  
て、行、く、と、念、中、に、思、ひ、出、し、を、取、つ、て、  
う、と、さ、あ、れ、が、い、ん、も、お、お、う、い、お、お、う、  
あ、あ、あ、あ、



一 春をききと若乱れ啼く柳の枝寒涼より河に映るを  
九とて「うぐいすの起せどぬる柳うる」(千代)の句  
を思ひしむ。

一 柳の静態に趣致あるのみならず風を過すを却て  
杖政をかし、千代の句に「流はれを解ふと風の柳  
うる」の句柳を描し得るめをそえぬ

● 今、香魚隈より上る時より、仰、御田の影多胎  
内川の橋のり回をぬる、橋下の激湍香魚を  
産まふる切時をばく此橋を流る、顔みよる、橋  
を流るること六十餘年、殊に感慨を感ず

一 山陽宮古人の詩を書し、千本姓をいして存す  
と見え、山陽宮古日又り、千本より七詩中、今心の句

を挿して者、全詩を録せり、廿の四年全詩を  
よる、よる、田、か、と、よ、こ、ん、七、本、千、本、を、書、と、の、一、法  
也。

一 遠近致し、後、歴々の書、起り、又、出づ、用、而、と  
余り、是、一、運、と、流、の、よ、の、抵、ぬ、歴、也、と、言、つ、七、い  
人の、嘴、を、受、る、は、巻、匠、に、受、ん、べ、一、捨、す、ん、か、歴、物、を、  
友人の、也、と、對、し、こ、こ、一、警、真、實、と、判、し、得、ん、が、  
歴、宅、家、を、を、失、い、ず、

一 巡、般、日、言、の、皆、既、り、時、西洋、の、天、文、家、の、新、星、と、見、る  
又、し、よ、よ、甲、乙、二、人、を、而、し、と、吾、邦、の、理、を、安、河、を、と、同  
か、見、を、為、す、の、あり、痛快、由、来、日、本、人、の、天  
才、の、氣、味、を、有、す、此、點、支、那、と、同、し、う、ら、る、こ、と



秋田の人の七々く日本に来るもの早く看破す、此也下  
敢て異とすまふと云ふ。

- 一 秋若清冷と思ひ、秋中山河の、全あ清洲河の  
清交まゝと云ふ、其村の云く、夏川を細くせん  
一七〇〇年、草子屋、中代、云く紅たいれ口七志  
の、清乃、云く此河の清思を侍ふの、  
一 清乃、清乃と云ふ、夏時の一快、定朝の歌  
に、大海の磯と云ふ、らん、定朝の浪をん、と云ふ、  
裂け、と云ふ、  
一 胸中不平あり、時、坤毫、波頭、云く、且く不平  
を忘る、梅道人、不才、云く、此、と云ふ、  
一 心中、有箇、不才、時、盡、云く、  
一 龍、横、中、或、枝、

- 一 予曰法を論ず、二十、四十、約年、又、云、  
一 雁、及、舟、子、を、用、あ、毎、年、倒、り、と、二、冊、を、持、あ、  
一 追、々、價、昂、騰、一、冊、或、回、日、久、く、と、る、人、踏、ふ、  
一 此、の、事、き、う、此、年、未、相、原、日、求、む、と、得、  
一 能、く、予、教、ん、と、云、く、  
一 予、ハ、勝、ち、り、と、

- 一 古、傳、云、く、其、時、者、急、に、ツ、タ、を、牽、か、す、と、  
一 危、険、を、い、は、ぬ、故、り、余、自、動、車、に、乘、り、運、轉、手、  
一 何、轉、車、と、呼、け、る、為、の、急、に、車、を、駐、止、せ、り、  
一 シ、ヨ、ツ、ク、は、余、を、い、へ、人、事、不、有、に、漸、と、い、ふ、漸、や、  
一 金、へ、と、四、支、疼、痛、と、感、す、と、甚、し、身、休、依、  
一 然、と、い、へ、ク、ウ、シ、ヨ、ン、の、上、に、あ、る、七、眼、鏡、ハ、飛、ん、び、







のち張日... 著と若くもや志ぬく北人を訪ひ  
しとの當て多し所... 北人の家へ馬琴のそ

張月の懸稿... 干存すとい初めし田舎の所也

○七月葬書物... 印の由は後春鐘一の... 内法文壇

恒間... 志函におよぶ... 及故... 就て左の記を不

あふ予と柳捨... 兼にハる張の酒合しに... ことあり

例を... 山人の... 料理の... 献呈を... 録しおふ

自合の... 既... 忘... 人... 事... 實... あり... 南... の

ことと... 追... 隠... 一... あり... の

感... あり... 坂... の... 五... あり... 七

既... あり... あり... あり... あり... あり

六月三十日記



○坂本龍馬が明治七年の夏の圓交がめ徳し  
皇座に下りてあはれ御用部が御駈念のあはれ  
陛下の夢枕に上つて二夜同し夢を繰り返して御  
又うづれ〇とまふことある徳をもとむること御  
歌不編多かあはれか其の瑞夢を歌ふは  
まか一時唐々く吹んれとまふことか自今何れ  
も今龍馬の徳を後世初めをわづらふことを得れ  
の御深夢の撰候は年輩二十餘をもえくは世漢  
か白衣と傳へ御前跡迄に腕き徳臣の坂本龍  
馬に候が世の戦い法しと徳心を候りし徳を力  
の。やあること徳臣我命と護り候くは皇  
回の勝利候ひること言上して其の徳は消へて

徳臣

ルとまふ陛下の御方々の徳を候くは龍馬  
の御撰候の徳を候くは徳臣の言上して其の徳を  
徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を  
来と寸分未だ候くは仰せ候くは徳臣の徳を候くは  
の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは  
其の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは  
相撰の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは

徳臣

徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは  
徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは  
徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは  
徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは  
徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは

徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは徳臣の徳を候くは



名島の城に内きかぶら  
千鳥のこゑの更けは  
大<sup>き</sup>殿の清を止し  
白衣の武士いんか  
いとおいそかぬやう  
徳川の故本に流るる

日<sup>の</sup>夜のおにねうま  
千<sup>の</sup>星のふりかへる  
徳川七<sup>の</sup>ちか<sup>の</sup>るを海  
そ<sup>の</sup>こゝろをすま<sup>の</sup>る

吾何年のちか<sup>の</sup>る  
うたがめ<sup>の</sup>る

清心<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>る  
さ<sup>の</sup>え<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>る  
白衣<sup>の</sup>の<sup>ま</sup>る  
岸<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>る  
舟<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>る  
舟<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>る  
舟<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>る

舟<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>る  
舟<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>る



よめ女に浪をいづめ  
坂本龍馬その人は  
死して落(四)の鬼とて  
の浪の形代子づくけり

○の浪の四五年前に自分から居る抜に入るや一ス子ん  
とよお人が居るわん。七(四)何もうる木生(五)の洋式也  
染があらはるんに怪しむわん。此の建築の一向飾りもない  
ペンキをいふ塗らぬが、漆を塗つたやうな板着  
てあつた時と木幹の主人が犬を曳いて術技を演  
するのを見れば印家が現る。併し此よめが何人か



るかに、近年は和をいふところ、つたえは某四の徴  
の商人が拾ひ作前(五)の歌ありと先(五)に、鏡(五)は  
前(五)の妻(五)込(五)やつてきても今(五)はや(五)る内(五)を  
甲(五)兵(五)と(五)名(五)を(五)油(五)法(五)か(五)ら(五)ん(五)相(五)南(五)儲(五)け(五)ら(五)ん(五)い(五)ぬ  
々(五)此(五)男(五)の(五)こ(五)と(五)して(五)う(五)ら(五)し(五)き(五)に(五)が(五)木(五)村(五)教(五)の(五)考(五)は(五)い(五)に(五)よ(五)り(五)  
伝(五)と(五)ス(五)る(五)は(五)武(五)兵(五)を(五)供(五)給(五)した(五)の(五)み(五)も(五)か(五)が(五)砲(五)術(五)と(五)も  
敵(五)に(五)と(五)あ(五)る(五)。大(五)人(五)を(五)喜(五)ば(五)し(五)る(五)も(五)い(五)ふ(五)事(五)に(五)あ(五)ら(五)ず(五)出(五)入(五)し(五)  
武(五)兵(五)受(五)買(五)の(五)呼(五)喚(五)を(五)い(五)ふ(五)に(五)と(五)云(五)い(五)ん(五)を(五)あ(五)ら(五)ず(五)也(五)家  
の(五)河(五)井(五)徳(五)し(五)ぬ(五)も(五)接(五)し(五)て(五)武(五)兵(五)の(五)供(五)給(五)を(五)用(五)ま(五)て  
此(五)と(五)云(五)い(五)ぬ(五)武(五)兵(五)婚(五)入(五)の(五)や(五)ら(五)ん(五)上(五)海(五)に(五)海(五)つ(五)た(五)こと(五)も(五)あ(五)る(五)、  
十(五)五(五)代(五)将(五)軍(五)某(五)某(五)の(五)才(五)略(五)武(五)か(五)お(五)四(五)か(五)ら(五)ゆ(五)る(五)金(五)と  
又(五)あ(五)る(五)海(五)軍(五)某(五)一(五)と(五)思(五)つ(五)て(五)此(五)海(五)軍(五)を(五)共(五)和(五)と(五)し(五)て



















すべし云ふ事も多し。諸侯版と云ふの諸藩の版本が當て  
徳川幕府が各藩に版刻を奨励したことがあつた。列  
藩の思ひくは種々の出版物を出版して版に紀物や諸藩  
徳川幕府列藩の思ひくは一二の例を挙げると川越藩は刻  
し日版刻日本外史の版位を版を重宝して版を刊  
後又史の意を。江戸の版木屋にかり切りで版を刊  
し此云いんるの川越藩が学利の爲め出版して版を刊  
か版の意を。転家から版権を訴へた後果五  
萬圓の権料を取らふの版を刊して版を刊して版を刊  
版もそのへきとをそのと樂安公の集古十種を刊して版を刊  
長年版の意を。在本を刊して版を刊して版を刊して版を刊  
かかち。富山版が本州一の豪華な版を刊して版を刊して版を刊



佛蘭西版刻の仕事が火災の罹つたの故に版を刊して版を刊して版を刊  
愛せられた悲慘の事あり。後世其の本州言は人斬り  
本州の名を呼ぶやうに其の版を刊して版を刊して版を刊  
あつた。樂安公の版を刊して版を刊して版を刊して版を刊  
つに多くの書一冊が出版された。其の多くが支那刊本の覆  
刻であつた。亦和漢の供書を集めて版を刊して版を刊して版を刊  
行さん。支那の供書も刊して版を刊して版を刊して版を刊  
し。其の供書も刊して版を刊して版を刊して版を刊して版を刊  
清溪所で出版して版を刊して版を刊して版を刊して版を刊  
銀の打んた。其の幕府の補給が出版された。其の官  
版と云ふ。其の支那の供書も刊して版を刊して版を刊して版を刊  
のものも全部を合言する。其の最も多数を占める版







給ふ付の比。終る本文も一も揮給の力が讀者の喜  
ぶ所と云うて、若双紙と云ふとまゝある。先からバウマ  
式も亦頁給がも分物と云ふやうなうつて、浮世俗の  
寄達と共に俗本が盛行し給が、よん上方の較への  
と江戸の本坊で、此の版本が汗牛充棟と云ふやうな壯  
觀を呈したか、このゆゑに江戸時代の出版の隆盛を  
語るこゝの心ある。

尚編んで置給ふやうな一書のあるの、偽本偽版のこと  
がある、偽書の内容の論ひあること、その關係がまゝか  
いろくの動機が或るの偽書偽版が出たこと、ゆゑに  
出版界が、進歩し給ことを語るこゝの心ある。日本も  
まゝ、僅に偽書偽版考、著者としてあるが、自今、尚



つて法叙を考ひ給時、油心れこともあるが、池田浮山等の  
のん敬するに、又委曲のこゝの語するに、若者も  
いふやうな、大成程、大和のよめもある。こゝに伊勢の  
官外宮の對し、其のお株を奪はん為め作つたといふ、  
又禁教といふに、本末の争うといひ、証拠として作つた偽  
や、佛教と神道が一体であるといふ、浮屠氏が方便の  
め作つたといふやうな、本末の争うといひ、証拠として作  
財利の目的の、權、佚してある書物を偽書として  
心書して出た類も少くなくあるが、こゝにその出  
改さんといふ、出版界が、その旨の餘裕があるか、の事  
が出版の隆盛の一端を語るこゝの心ある、又聊に編  
んて置くといふ。



而は他に解して置きたいことのあるもの末書の盛んに出版せ  
られたことある。末書とある本書に對してその心、本書  
を出版することすら容易ならず、字本のまゝ長く流布し  
たものが漸やく版刻するものと、字本が區々あるものを誤字  
も多くなり、校訂本がいろいろ出版され、注釋本が随分  
出て、評論書が出ると、其の評論も及駁する本が出版  
一書に就て數十卷ある末書が出版したこと誰れも首肯す  
ることであつて、古くは記や日本書紀や萬葉集や源氏  
物語等も、就て如何なる末書が多く出版され、目録に就  
て見ると一驚を禁し得ない程深いものがあるが、是れは  
出版區域が狭かつたことが、こゝに擧つても人合このむあ  
る。



以上の如き簡単な記述の板刻本の進歩の大勢は、略  
合つと思ふが、併し爰に多少の辨説を要するところの  
著作家が出版に就て書外の苦心とこれとをいふ。後  
世とあるといふ多くの書物と類し、其本の刻さんを経  
路に沿って、●と頓着する、あんなにその著者の著述に  
からず、時の書肆の類々出版を懇望し、これとある  
と一概に考へるゝ一應無理に思ふが、多くの名著あると  
涙を流して、いふげいぬぬの苦心がある。北条の栗山と云  
へば、昌高の著の大儒である、其人が初書に便せんといふ編  
纂した雑字類の二冊、いんる本尾も轉つて、あ  
るもの初書に、熟字を教へたものであるが、其末より  
出版書肆の名も書してあるから、誰れもいふ人々書物



ハ書生用として書物屋がヤスくと出物にしようかと  
考へてあつたが、實に之を出版するに今の人口が想像  
も出来ぬの苦心があつた。とまゝの栗山の書物屋の清  
水は任かして原稿を抛り出せばやらせればいゝと、栗山  
ハ之を刻するに、其頃旅本が、男坊とむむ生計の  
色板木屋の才子も、さうしてゐるよめかいつかあつたの  
貝男も栗山の家へ連れて来て、衣食を借して一二年も  
費して彫らせた。さて刻に成つたが、之を刷るに紙が悪く  
とまゝの栗山ハ紙を贈ら資を窮し、紙のむむじもさう栗  
山の本回漢文に實才が、匠者をやつてゐるよめハ無心を  
その紙代、湯美干を出金とせせれとさふのが、此方  
の出版さんハ任路に、あつたことが、近頃さうして今つた漢



ハ栗山が才を出資させれば紙が出来たから、の事であ  
る。此手紙も、~~紙~~刻者を、学僕として家へ、四五百  
形とせし、この事、認めを、出資させれば金も、這々、金  
の道があつた。認めを、若し此手紙の、見えて、さ  
ういふ、何人も書物屋の仕事と理解するて、あつた  
が、當時の大儒は、僅に二百枚程の書物を出版するに、自  
ら、板木屋とさう、用紙すむ、自から、誦人、むむ、さうい  
ふことを、今日と異つて、出版の容易む、さういふ、思ひ  
や、さういふ、の、である。

福山藩の儒者太田全右の韓非子、**韓非子**、**韓非子**、**韓非子**、**韓非子**  
の韓非子の注釋で、支那も、誇り得る、名高い本が、  
その出版、の、悲哀の歴史がある。全右が、多年心血を



深いに漸やく脱稿し時江戸の蒲師附近に火災があら  
ての蒲師の歎焼すべし此の苦心の結晶の一炬と許しそ  
れも社名といふかあつた幸ひと免れん此の全高の支  
時の激栗しうも思ふれ。僅う二冊部にかまひ稿未  
が、~~い~~んま変災必無くうんも限らる。切せ二  
十部位校ししと置きたれと考へに揚句、あま人から  
米法字を借俗せん此のいひごと長人だかをも念ふ組  
まかいつて見ると、是らうん字が澤山あるのみを  
先の補是しうけんがううううう。えを補利する  
二三年もあつたかあうううと想像せんのか、~~見~~その補利  
をいふもの全高の長田が十三回位の少年むあつた。  
外に○赤か二三人あつたが、最年ううう。此の吉上業をう



傳へたの、全高の女は末を数文に考へてあつた、是は  
ハ子供の名を特々列挙してあつた。全高の一方に法字の  
神刺を督勵しう、~~勢~~注の増補、没致した。此間  
細君が重患を罹つて、~~子~~子を全高が自ら抱いたう  
買ふたうせうけんがううううう。此のううう病特  
臥し児ハ飲わううううの境遇、~~信~~の、~~屋~~せがし  
遂に十冊の本を法字、~~但~~んじ二十部を刷り上げ  
たとえあのが、此者の出版経路があつた、~~東~~津波、~~い~~んま  
といふ、~~全~~く家庭版といふべきであらう、幼弱の児童が涙  
ううううに刷り上げた。  
(歴代)  
菊池空齋の前賢故実には著名人物の風貌や其の  
時代の服装を考証して繪うううう、~~今~~の珍重せん



















とばかり、限らず、多くと述べたことをしる。唯、此の最後  
に觸れて置きたることは、書林が漸やく確実性を帯びて  
きて、或る時代より刊行書林の成り得たこと、  
つての此事業、その書林が独自の基に成り得た  
るに市業が、今、書林を成り得た、友府が、  
り、中書あがらるる、却つて確実性の信を待たざる  
つに、この書林、その数年を、十数年を、要する大  
部の書の出版である。就中、字書、辭典の類、編纂  
に多くと、自らを、安し、若し、その編纂の  
あり、一向に興し、故、その家を、集め、巨大の  
を、扱し、或十年を、任し、僅か、一冊に、ことを、今、有力の  
書林の手、七、着目、之、出版、その、こと、を、  
備

備

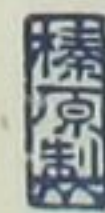
り、大い、時、代、を、し、る、の、際、を、後、果、の、時、  
自、ら、し、る、時、を、し、る、の、際、を、後、果、の、時、  
政府が、もと、買上、て、頒布、を、手、傳、つ、  
こと、有、つ、ま、今、昔、の、感、を、  
を、追、つ、て、洋、書、を、友、譯、す、る、  
が、い、くら、も、あ、る、百、科、の、  
冊、子、も、及、び、西、洋、の、エ、  
課、の、よ、う、な、  
巨、萬、の、編、輯、費、と、印、  
す、る、こ、と、を、失、  
明、次、以、後、出、版、の、  
す、る、氣、を、大、く、し、



結果は、身度(みくら)の現象と云ふべきを得る。

私版の内憂去年代及部化人と記し、南北朝代の漢名、金良南、陸孟采、二人北朝人の姓、歴、心、きんと可なり、大部の書と出版して、五山版の内と見え、

おは南北朝時代、延徳二年刊の大本あり、大内義隆の刊書あり、大永八年の醫書



伊地知重光

大全あり、尼子時久の法書、天文版の聚々、略略、最も著しい。南北朝、五山版、隆盛と極め、修勢地方、版七、出づ。

教版の百萬塔の寶龜版、四種、陀羅尼經、と最古と云ふも、其後、勅版、文禄二年、朝鮮、と分捕の流字と次、能、創と試み、古、支、春、延、の、變、版、以、後、初、め、と、云、は、る、勅、版、と、後、陽、成、帝、の、瑞、字、と、後、其、中、二、年、と、八、年、と、も、若、干、の、教、版、あり、治、字、ハ、日、本、を、云、ふ、向、後、長、尾、帝、の、元、和、七、年、

神道書  
四



天正十八年  
西映印術  
東漸

横浦道祐  
正平神傳

秋田城分春盛  
吉野山開眼  
中書寫切  
後の事

高雨の  
何休井の  
清原家

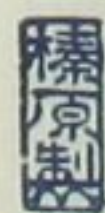
勅政皇朝類考云の

天草殿の私版のゆゑ豊きなるも寺院版と見  
ることも毎高ちるべき歎譯字の時入の換  
もんきこと

豪族の版を主のきへき歎完  
悦前八景版所留送本直江並後の文書  
尼子時久の法書在 大内義隆の刊本 堺  
の豪紳の刊行と係の醫書大全の如き此  
類に入るべき歎尚高直と是刊日尊氏が累  
降諸法の如き刊行をやつてある

南度道基  
法書本

宗瑞  
正平大系



江戸が幕府と開いて久しい間京都が版  
刻の中樞であつた江戸版の漸やく成るまゝの  
江戸の元禄以後である。

五山殿の盛行の先り奈良に刊行の目を定めて  
高僧比真福寺、行のし東大寺西大寺も進  
歩のれ、所謂春の政と稱する一類の刊行の  
真福寺の配下に属する春の社、山版とんた  
このあり

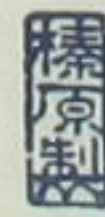
天角公政の文化の佛教の將來にこのあり佛教  
法印の版の供養の為りうたのび、其の的波が



外典に及んぬるの、五山所盛行の儀かゝる、外典刊行  
の手を延ばすこと久しく経海が行せり  
也

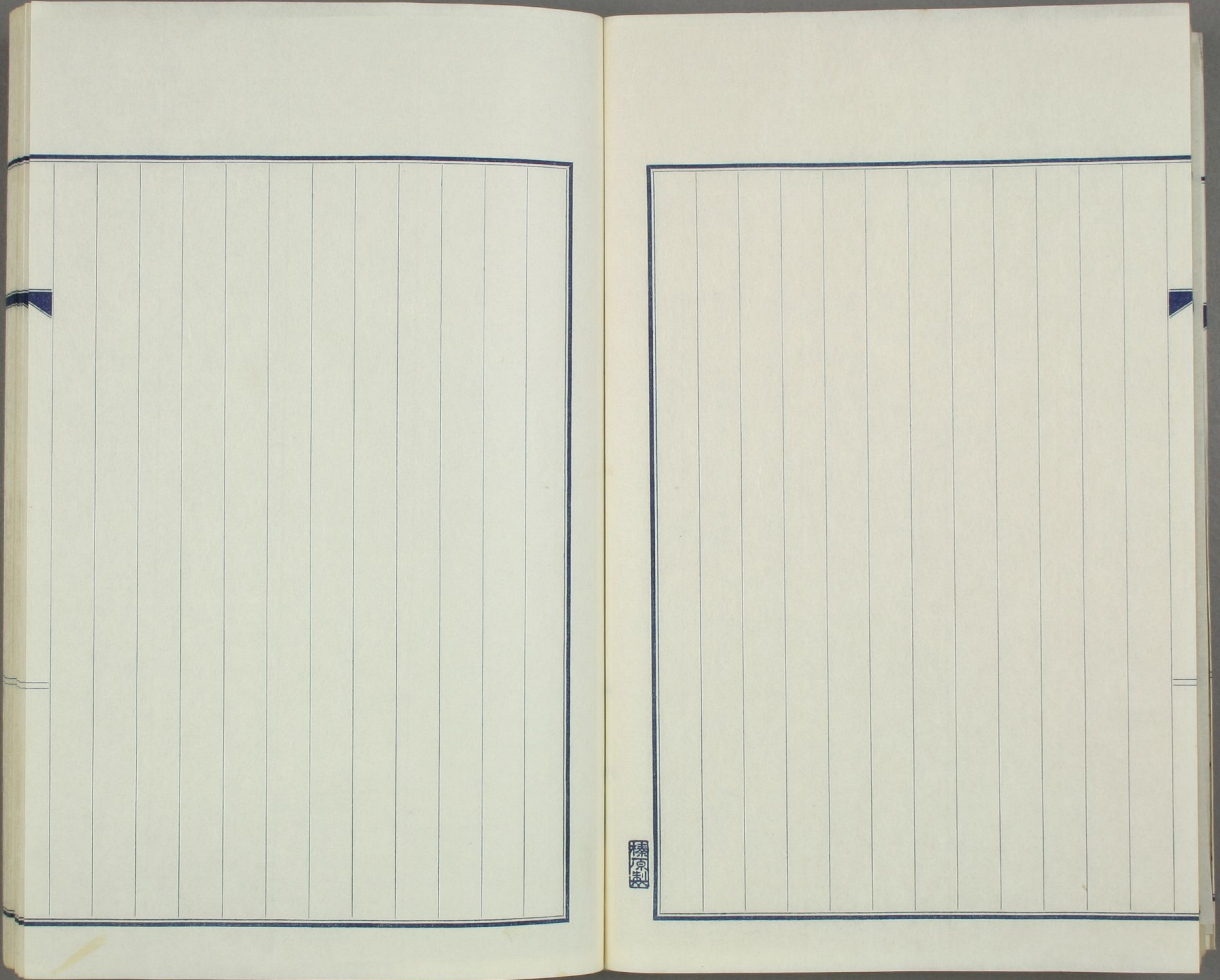
所謂五山の事、豫の東漸ひ起つたよ、武家  
の支拂を得たの、経海難を免れ盛んに刊行  
ありつた。此の宋元刊本が多く輸入せん、刊  
本が宋版式なるもの、一特徴は支那から刻本  
未報の、版式に大なる進歩を記す。外典の  
多く出た、一武家の需用を充てり、多々の刊行

五山を刻す、此の福建を以て、多々の刊行



か、其の姓名、刊版の二匹、其の目利、其の  
事、命を陳べ、刊版の、其の事、其の事、





東京製



以下  
三丁  
白紙





# じさみ

第三號

## 鐘聲

春城生

私は宗教に冷淡なものだが、寺の鐘聲を聞くと、何となく一切の邪念が一掃されるやうな気がする。深夜の鐘、客中の鐘には別して此感がある。私は除夜の鐘を聞くことを好み、多少鐘を聞き分ける能力があると信じてゐるが、新舊、年の境の鐘聲は感慨を深からしめるものである。各宗本山の所在地京都で除夜の鐘を聞きたいと思ふてゐるがまだ其機會を得ない。私の唯一の體驗は、先年修善寺に浴した時、旅館が寺に隣接してゐたので、朝夕備され鐘聲を味つた。此地は源家の一史蹟で、頼家が横死し母の政子がそれを吊ふために來た悲劇を傳へてゐる。私は此等の事を思ひ出で、自分の耳に觸れる鐘聲は即ち六百年前其儘の聲で、頼家母子も同じ聲を耳にしたのだと思ひ、更らに彼等はどんな感想を起したであらうかと案じた。鐘聲は今も昔も同じやうに、即刻河に落ちて果ては海に入り尋ねるに由もないが、あの悲劇を追憶して誰れか感慨に打たれないものがあらうかと、しみじみと思ふたことがある。鐘聲ほど懐古感を起すものはない。

鐘は洵とに寺の寶器であり、樂器の最大なるものである。寺が名鐘を誇りとするのも無理はない。此鐘こそ昔から非常時を警醒したサイレンで、千年前の國家の大事を知つてゐるものは此鐘の外に何も無い。



善策に腐心してゐる有様は日本では見られない光景である。彼等は自分の爲めばかりでなく家のため夫のため子供の爲に延いては國家經濟更生のために讀書するものであると云ふ事を信じて居るのである。日本婦人の現状は本を讀む習慣がなく又書物を讀むことを遊びと同様に考へ新聞一つ讀む暇さへ無い程家事に追はれてゐる人を模範婦人などと稱して賞讃してゐるのである。夫もそれで満足であり妻もそれを一種の誇りとしてゐる。而して讀書による修養がないため仕事に無駄が多く能率の非常に低い事などは自覺してゐないのである。偶讀書する婦人でもあれば寄つて集つて誹謗すると云ふ様な有様である。これは(一)社會的に讀書に關する眞の理解無き事、(二)婦人自身が讀書を愛好せぬ事、(三)閑暇を持たぬ仕事の拙き處理法等が原因をなしてゐる。第一に婦人の頭を改造し第二に男子の家庭尊重が出来れば餘程改善されるであらう。かくて婦人が家庭の衣食住に對する眞の改善を讀書によつて會得し實行するならば經濟更生は易々たるものである。何としても婦人は消費經濟の支配人である。

又西洋では老人になればなるほど暇が出来から讀書に勵み一家智慧となつて家庭經濟更生の發頭本となるといふ具合である。

五、鍛鍊修養と其の價值

人は讀書によつて頭腦を鍛鍊修養すればする程その人の人格的價値を増加するものである。これを鐵に就いて云ふと、五圓の鉄鐵をとりて之れに鍛鍊を加ふれば拾五圓の釘とすることが出来る。この釘を更に鍛鍊して針とすれば參千圓の價値が出る。この針を更に鍛鍊して最高速度鋼とすると貳萬五千圓の價値を有するに至ると云ふことを冶金界の大家工學博士が云つて居るのを聞いたことがある。人間も同じ道理で、五圓の鉄鐵で終るか、それとも拾五圓の釘となるか、更に修養鍛鍊して參千圓の針となるか、それとも尙更に修養鍛鍊して貳萬五千圓の最高速度鋼となるか。これ全く圖書館等を利用して自己の心身を修養鍛鍊する程度によつて生ずる差異ではないか。

日本刀は非常によく切れる。これは非常に鍛鍊せられた結果である。支那の王陽修は日本刀の歌を作つて之れを絶讃した。古今の銘刀は非常なる鍛鍊を経たものである。古來有名なる相州ものの刀身は無慮八百四十萬七千四百枚程の刃金を鍛へ合せたものである。其の鋭利驚くべきであるが苦心努力も實に驚嘆に値する。齋藤工學博士の説を聞くと相州もの、

























す二百万石の漲度に成るべく暫く是を仰せ給へんが、是れを以て規模が少くして二事と進め給へると是れを以て伊豆の宮におくつに時を四十萬石の増額を申出で、汝村をやり直して出来比の今の宮城にあつて、正局と鳳凰の分、申す所は、此の多しと申す所は、此の多しと申す所は、













検査に於て身体を病むといふは、  
馬二木居士の悦と聴と久下と減念をやり、  
が習得とどうも、体力を弱めれば、  
とまふ、二木の粗念論をい、  
や減念の結果仙人をせむらんが、  
の癖に、学養不良に衰弱を身振くとい、  
利かどうの治れ、  
● 戦後の高田の、  
えんが、こんどん多人かと、  
に在り、  
の子息の、  
赤兒が、



一 エテラ、  
於ける、  
七願を、  
解く、  
價値も、  
元々の、  
志きり、  
一、  
極民に、  
ふと、



● 新全集の法橋年史七十四巻日韓合邦局  
 的の法年間の形を集成して其終を告げ  
 たりと一巻の其案列である、好むまゝにと  
 言者が中途に病んで此のまゝに歎息し  
 たりと七巻終を告げたりと出版物に  
 終る何んともいふ。

● 此の法送の向を強くして其味を存し自分の  
 歴中の考見を則ち放送し此の法  
 送をレコードと容ん、放送者たる者の  
 其書もあつた、自分のレコードと容ん  
 此が自分のとんと新いつた、實に自分の家



レコードと容ん、放送者たる者の  
 其書もあつた、自分のレコードと容ん  
 此が自分のとんと新いつた、實に自分の家  
 英つてあつた、誰か自分の口真似をやつて  
 あつたかと思つた

● 此の法送の向を強くして其味を存し自分の  
 歴中の考見を則ち放送し此の法  
 送をレコードと容ん、放送者たる者の  
 其書もあつた、自分のレコードと容ん  
 此が自分のとんと新いつた、實に自分の家  
 英つてあつた、誰か自分の口真似をやつて  
 あつたかと思つた

● 内閣政令の趣を天皇の消息を



に餃子を常食とする為の便と自ら移してゐ  
たが、エエツト版の太平記の入札が八千圓を  
過ぎるというのを、親引をこれと受けへた

- 一 舟の散策、元角足、銀座まで行くが、四  
日前から遠近的の散策を試み、甘清澄公園  
を訪れて又の風景を歩き、或る日の、運りの木  
場を訪れて又の木材の深場を見、附けよう  
釣り堀を訪れ、又東陽公園をもえれば、公園  
外に探りて見ると、さうさうな木材風景  
とあり、この江戸風味と感ぜざるを得るうら  
二 三〇年前の練馬を、自動車をドラブ  
として武蔵野原の口を認め、終つて豊島園に入



つて見れば、この昔の城址が今なお遺地と  
程々娛樂の設備もあり、うらやまに思ふところ  
と、尺新井の清流があり、あまの見えるべき  
風景がある。大きなプールがあり、池、軍大  
の競技場の催さん、着るく犬がみちり、泳ぎ  
人形を揃へて物販する光景を見れば、この設  
備も須田町合宿の如きの任管に係るもの  
家庭人のおむつ場として、(南の島と見え  
た。

- 一 甲子山泊、今も昔も、土佐の武市半平太の  
話が出る、武市の経歴を多く知るもの、武  
市伝記を讀んで見れば、さうさう後継的人物が







あつことを分得しはが去田東洋を倍殺しはと  
 するにせしと容を三罷こえは。夫強り坂本龍馬  
 が大切な役者比武市市やふ日重しとめ  
 たら、大政推行のみと休、冬を得るうらむに  
 あらう。

お政とよ使冬、容をの妻の親かあるから龍を  
 得たりの無罪とす。北人、山中の姓を授けられ  
 容を、山内と山中の姓を授けられ。容をの妻  
 殿を得たため岩崎を助るお政と若端工とす  
 を受取らば流擧のよかあつは。容をの死に時  
 狗死しとよ比時、板垣の御死すも所人死せ  
 ずとよと止めはとよ、活か残つてあつ

横濱製

# 夏祭

〔二〕

## 日本三喧嘩祭

新發田諏訪神社も其一つ

### 異變を知る寶物の首

新發田町郷社諏訪神社の靈木繁莊  
 な流りは北陸地方屈指のものとさ  
 れてゐるが先づ神社の古い歴史に  
 さかのぼつてみよう  
 大化二年(二九六年前)信州  
 民族が移住を命ぜられた際産土  
 神たる諏訪大神の御分靈を奉戴  
 して現在の北浦原郡聖籠村大字  
 諏訪山に祀つた、そして天文年  
 中舊新發田城主佐々木因幡守治  
 長公は

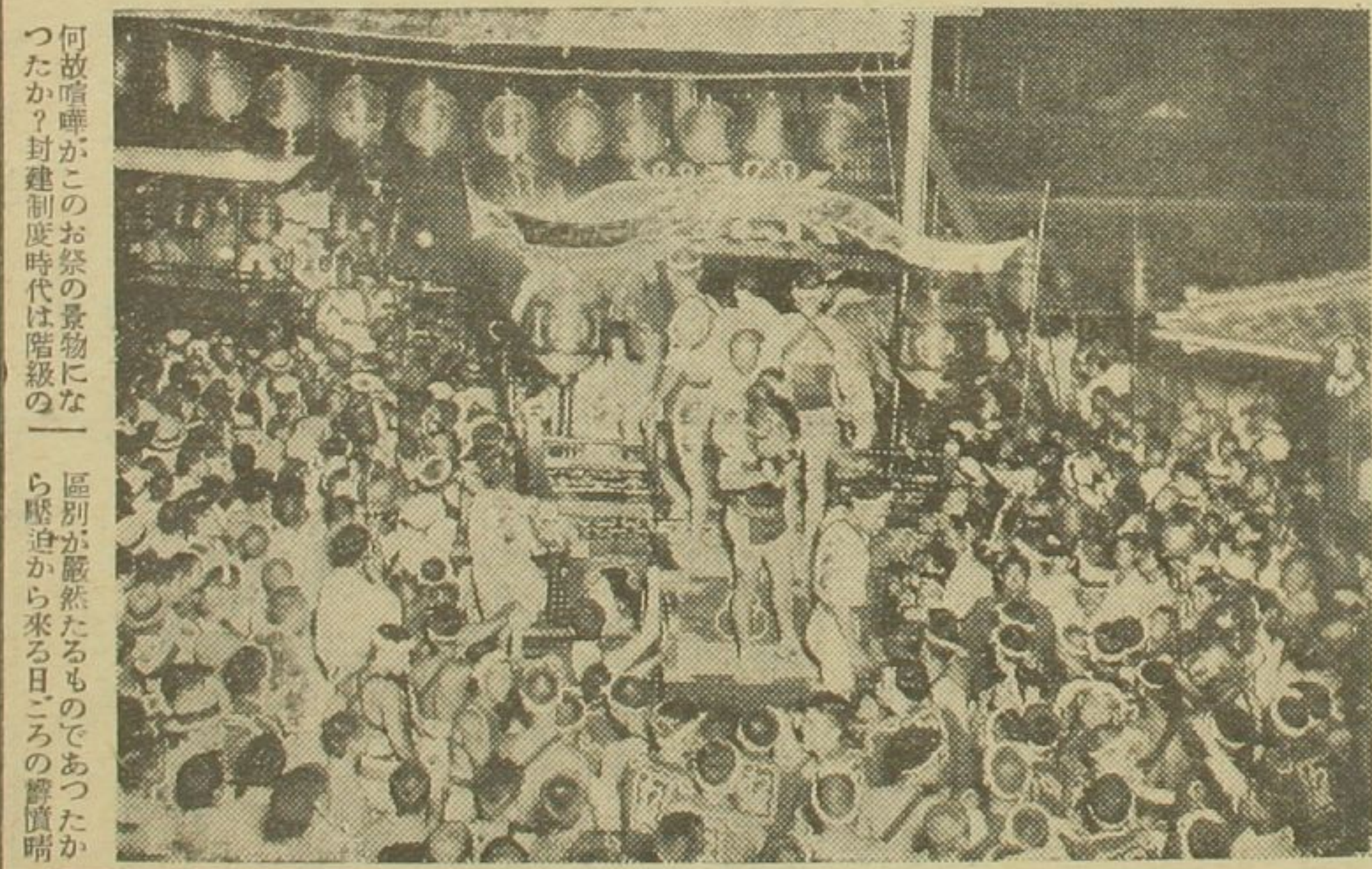
くれるものはなかつた、慶長三  
 年溝口「著」源秀隆公が加州大  
 聖寺より入國するに及び社殿を  
 城中古丸に新築、更らに寛永二  
 年鍛冶町(現古徒士町)に遷宮  
 し溝口出雲守源直温公の時代に  
 京都北野天滿宮の社殿を模し城  
 東の地に鎮守神として造營今日  
 に及んだものであるが工事は天  
 祿元年三月から七ヶ年餘かゝつ  
 た程大がかりなもので

る諏訪神社のお祭りは例年八月廿  
 七日から廿九日までの三日間賑や  
 かに行はれるが各町内の臺輪(屋  
 臺)を曳く若衆達は臺輪が追突す  
 ると、直徑七、八寸の屋檜石や隠  
 し持つたみつ矢を一團となつても  
 みにもみ合つてゐる中へ勢一杯投  
 げつけるなど喧嘩祭にそむかず物  
 狂い

諏訪神社のお祭りに比較になら  
 ない家莊な社殿だと  
 いはれてゐる

天滿宮と比較になら  
 ない家莊な社殿だと  
 いはれてゐる

日本三喧嘩祭の一つといはれてゐ  
 れたものはないといふのだ



らしとばかり無禮講のお祭に  
 發させたといふのだ、また荒  
 即ち軍神諏訪大神の御心を慰め  
 るべく大亂闘をやるのだともい  
 はれてゐる近年は警察の取締が  
 厳重のため殺伐な行事は影をひ  
 そめて行くが當時の

はさぞこの喧嘩祭に  
 若い血をたぎら  
 ことであらう。天  
 元年溝口出雲守源直温公の命を  
 受けて同社を奉戴した大坂の榎  
 梁島居某は自分で自分の首を刻  
 みをさめたが現在神社の寶物の  
 一つとされてゐる、戦争の直前  
 にはその首に異變があるといは  
 れてゐる

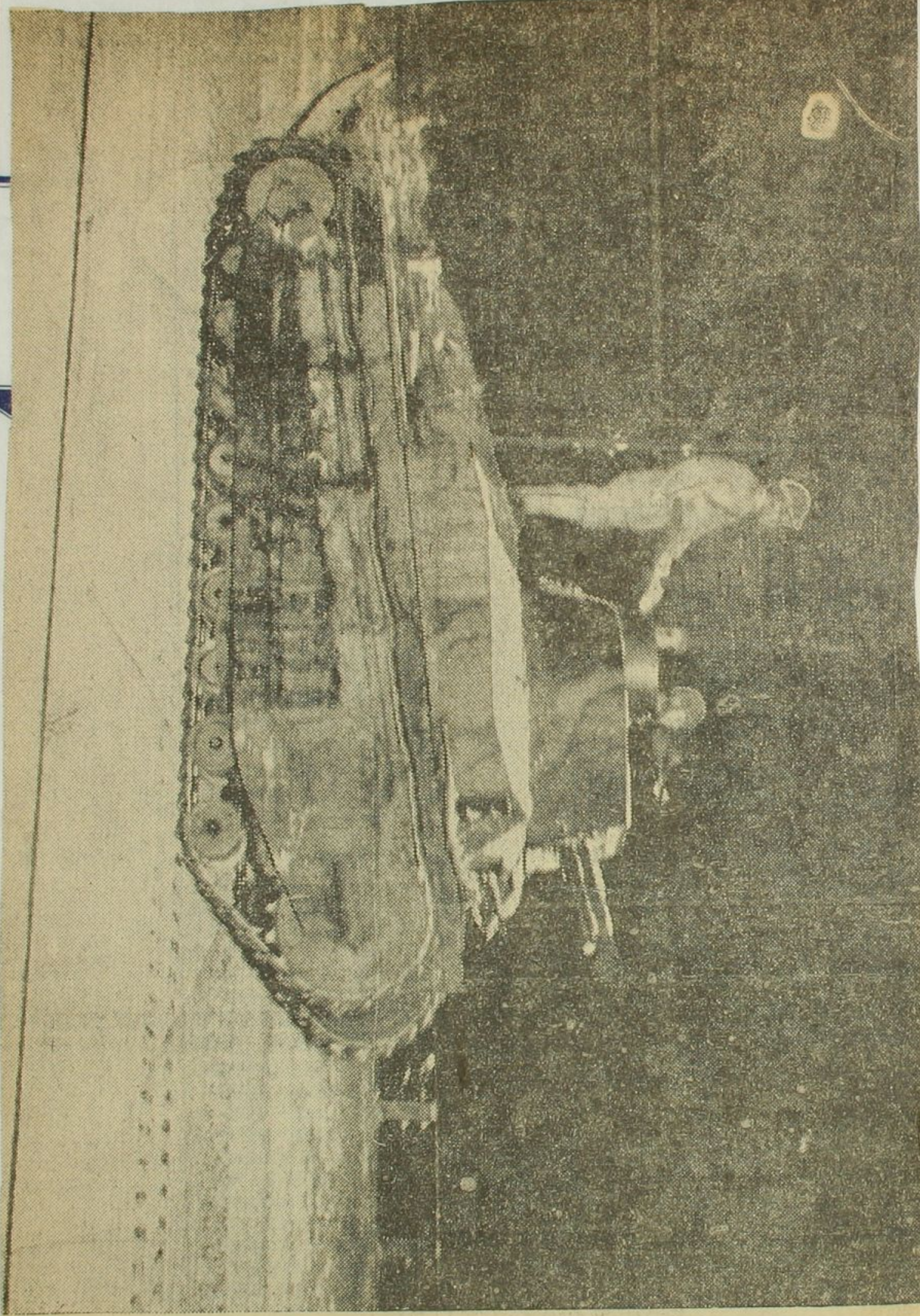
官軍進軍！會津軍越嶽！——新發  
 田城下の非常時だつた戊辰戦役の  
 直前に首がこつそりかくれ日清戦  
 争勃發前にもこの寶物が

の眼からかくれてし  
 まつた、近くは昭和  
 六年萬城聯隊へ入營する新發田町  
 の壯丁が同神社前で行行會を挙げ  
 た際も現社司島山重古氏が御座る  
 開けると首の位置が變つてゐて不  
 思議だと思つてゐたが案にたがは  
 ず九月十九日夜滿洲事變の一頁が  
 めくられ軍神諏訪大神のお告げが  
 的中したのだつた

(寫眞は喧嘩祭りの雑踏)

何故喧嘩がこれのお祭の景物にな  
 ったか？封建制度時代は階級の  
 區別が嚴然たるものであつたか  
 ら壓迫から来る日ころの鬱憤晴





闇夜都大路を馳驅する戰車 【事件案】發の夜

◇二十九日空中より撒布の歸順勸告

下士官兵ニ告グ

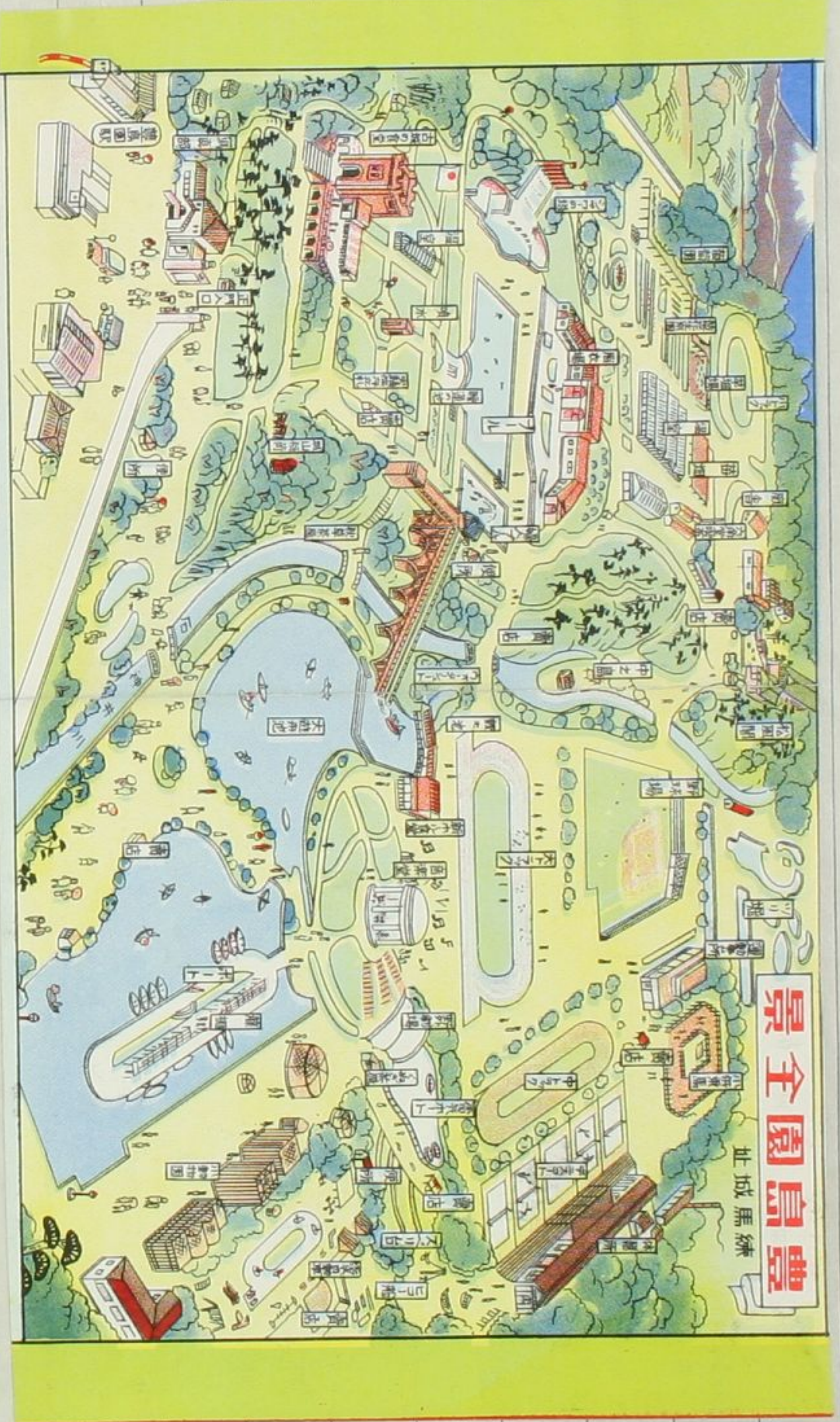
- 一 今カラテモ運クナイカラ原隊へ歸レ
- 二 抵抗スル者ハ全部逆賊テアルカラ射殺スル
- 三 才斷意ノ父母兄弟へ歸誠トナルノテ皆許イ  
テオルゾ

戒嚴司令部





豊島園記より冬照



豊島園

春雪將融 伯曉晴書窓 而秋吟賦  
 醒砚池 荳叶 楸梢 滴待雪新  
 詩字 之 聲

昭和二十九年十月 豊島園 主 豊島園 豊島園  
 司 豊島園 豊島園 豊島園

此幅を画し、未の起一運を治めよあり、お徳らひも  
 仍事にあらず有時、尾ハ下、嵐迄の如く、此詩、秋  
 の詩集あり、故ここ、又、能也、



○予の者室に振富野谷の家の書瀧風詠堂の命歌  
と掲ぐ、えんお戸の若田北郡の芳極富の也す、  
風詠堂の北郡の聖野、北郡の北戸の心家、  
聖の著述あり、坊の書よ、没跡し、此を、先此  
人の懐書一冊及故教千一枚出せし、予、遂に求  
得せりし、傳、清ある也、若お戸又、若お戸を  
あぢりし、此の事、坊左の、

若田北郡、障を、貞正といふ、字、子師、将  
此又、主書、と稱し、北郡、と名す、  
主原、東里の、門人、と、寛政三年、進仕、天  
保十年、改仕、と、稱す、と、名、弘化三年、  
歿す、年、七十三、



廿著

廣野記一冊

神田中古予記二冊

若田北郡見又録

叔著詩用十二冊

寺社諸朱印並諸手札帳一冊

家録遺言一冊







村上町堆朱堆黒の調査 (上)

佐藤榮喜

序

村上町はその昔平氏の落武者の隠れ住んだと云ふ仙境より源を發する三面川の下流に位し山紫水明人情こまやかな縣北の小郡で、歴代藩主の不撓不屈の産業獎勵の結果、山邊里織(山邊里村)、茶、堆朱堆黒、鮭産育養寺の事業を今日に至る迄隆々續けて居る、本稿は昨年度の山邊里織の調査に引き續く漆器の調査であり、この堆朱は堅牢、典雅、精巧にして東洋趣味の美術工藝品であり、何人も賞讃措く能はざるものである。沿革に就いては村上郷土史、其他は小野爲郎氏の御教小を受けた。

第一章 沿革

新潟縣岩船郡村上町の特産である堆朱堆黒の沿革は村上町の建築界との變遷に關係する所が大である。故に先づ其れに就いて少し調べて見よう。

由來建築は彫刻を生み、彫刻は髹漆を生ずると云ふ事は嗜好の常であり、又緻密精巧なる大建築は自ら工匠の母胎である。口碑に依れば昔村上是は技術精巧の工匠に富んで居つたとの事、今尚は近縣では「村上大工」の賞辭により其の名聲の名残を傳へて居る。村上本町小學校は明治初年の建築にかゝり、其の後改築を施さず今日迄頑丈を維持して居り、小學校建築として國寶的な存在と稱せらる。蓋し其等名工の輩出は寺院建築の隆盛であつた事に依る。

抑々寺院の建立が建築、彫刻、髹漆の技術發達の原因をなしたのは本邦歴史上に於ても明かなる事實である。之れが村上漆



器工藝の發達した所以であり、然も區域と人口とに比して、餘りに多い寺院の建築は著しく工匠の技倆を琢磨せしめたものである。

山邊里村大字門前の耕雲寺(明治十九年全焼し、今は再建のもの)は應永元年(二、〇五四年)楠正成の曾孫正勝が僧となり此地に來て建立したもので、末寺四百八十を有し、村上町宇羽黒町の龍皇院も其の一であつて文安三年の建立である。工匠及漆工の鑑定によれば本寺、末寺共に建築、彫刻、髹漆等京都風を存すと云ふ。果して當時若干の京都工匠、漆工が當地に來て此の建築に従事し、従つて是が村上の彫刻術を促したものである。

降つて天文年間(二、二〇〇年頃)に村上を中心とし寺院の建築は盛んになつた。中でも最も頻繁であつたのは村上頼勝の時代であつて、短いものは一年、長くて六年を経る毎に一寺の建立を行ひ、在城二十年間に一院七寺をの建立を見た。元和四年堀直寄代つて領主となり、大いに土木工事を起し、城廓邸宅の増築、城下家臣の家屋の建設等、寛文元年より五年に及ぶ。

其時京都から特に木匠伊太郎外四人を召して工に與らしめ、次いで寛文二年羽黒神社の再建に際し京都の漆工を召神輿の髹漆に當らしめた。寛文七年神原政倫代つて領主となるや藩士荒山市右衛門を漆奉行とし、永島市二郎外十名を屬して大いに領内に漆樹を栽培せしめ、工藝を獎勵した爲め、斯術は著々進歩した。當時漆工としては藩士中山五右衛門、町家に一世山中佐七彫工は山脇李兵衛あり共に名工であつた。

享保六年内藤式信領主となるに及び益々工藝を獎勵し、作事係須貝次郎藏をして更に領内に漆樹を増殖させ、之が爲特に貢税を免じた。當時彫工には山脇李兵衛、板垣伊兵衛、漆工には二世山中佐七あり延享、寛政の間、彫工山脇李兵衛、板垣伊兵衛、板垣八郎治あり、漆工に三世山中佐七、石田五七等皆名工であつた。寛政、文化(二、四六〇年頃)の間には前記の外更に彫工富樫興助、漆工に成田善太郎が出た。佐七の弟新助(明治八年生)は彫刻物を髹漆するのに紅殻を混合したものをを用ひ凹部は刷毛で凸部は指頭で塗る事を案出した。爾來同家は勿論石田善七、成田善太郎等も髹漆法に依つたと云ふ事である。後漸次改良し朱又は紅殻を混合した漆液を案出した。







も多く桂川在三最も漆に熱中し、遂に木彫、堆朱、堆黒に鎌倉彫を折衷して一新機軸を山だす。斯の如く木彫、堆朱、堆黒は年と共に益々改良發達し漸く村上物産たる名聲を高めんとしたが、折柄明治維新變亂により斯業の發達は頓挫し殆んど恢復の見込はなく二、三野志の徒の獎勵により僅かに其の名残を留める内、漸く顧客も出で販路も開けた。士族側では廢藩の爲自活の必要上、先の道樂を今や公然たる生業となすに至つた。

次いで明治十年第一回内國勸業博覽會に周齋椅子を出品し花紋銅を賞與せらる、時に周齋は七十二歳であつた。明治十一年新潟市敦賀屋村田某氏より佛壇の註文を受け、二代周齋は父の意匠の下に刀を揮ひ心血を注いだ。偶々十二年父は卒す。翌十三年漸く竣功す、其價額一千五百圓は世人を驚嘆せしめた。其の子を周太郎と稱し、此の人、此の圖畫と相俟たざる事を痛感し、東京に出で、畫家瀧和亭の門に入り、周亭と號し技大に進む。歸郷後之を彫刻に應用し更に作品の面目を一新した。

世の需要は年々加はり製作者亦増加し、粗製濫造の品市場に現はるゝの弊を呈す。周亭等は之を憂ひ明治二十六年四月山脇長兵衛外六名と共に村上工藝會を組織し、斯業者を統一し技術の進歩と販路の擴張を計る。此の年米國コロムビアに世界博覽會の擧があつたので栗山彦三郎氏は此の機に乗じて販路を海外に擴張せん爲め、當業者に資金を貸與して出品せしめ、親しく渡航して會場を視察し之を當業者に報告して刺鼓鼓舞した。之が村上漆器海外輸出の因をなしたものである。此際周亭は書棚板垣伊平、高田耕平は隅棚を出品し各銅牌を授與せらる。其他明治卅一年京都に於ける全國漆器漆生産府縣聯合共進會、日本漆工會競技會及び東京漆工會競技會等には明治二十五年以後毎會出品し、而も毎會賞を受ける者少なくなかつた。斯くて斯業は年々發達し今日に及ぶ。

村上漆器の沿革は略概此の如く、之を要するに單に「村上漆器」と種するものは本堆朱堆黒と木彫堆朱堆黒との總稱である。言葉の泉に「漆器に先づ刻らんと思ふ深き程に朱漆を塗り上げて模様を刻り上げてせるもの。底に朱を塗りかけて朱のところにまで刻り詰めたるを堆朱と云ふ。其の黒漆なるを堆黒と云ふ、又其の模様唐草の如く蔓の如くなるを「ぐり(屈輪)」と云ふ多く香合、硯箱などに」とあるが、之に依り堆朱堆黒を知る事が出来る。されば其製作は頗る長き歲月を要すると工費不廉

計

一、二〇、八三〇圓

右は昭和九年末現在である。之に觀るが如く村上産業中工業は斷然首位を占め、全産額の約九割強に當つて居り到底他の追従を許さない。曳に此の如く重要な工産物中漆器は第四位を占めて居る。

既に述べた如く村上漆器は堅牢且つ豊雅な工製品として廣く全國に知られて居り、其の製品は内地の需要のみならず輸出品としても相當の聲譽を擧げ、需要の増加と販路の擴張に従つて專業者も増加し、且つ彫、髹分業も益々確實となつたので彫刻の技、髹漆の術は愈々精巧を極め、當業者は村上工藝會の設置により斯業を統制して基礎も強固となり、村上町工製品として一層將來あるものと注視せられて居る。

◆熊おとし

以下は北蒲原郡笹岡村田中傳次郎翁の談である。

昨年、松平山を越えて綱木(東蒲原郡)へ出た時山の少し降つた處に熊おとしが二つかけてあつた、それは樹枝を熊の通る様な道に三四尺巾に長さ約五尺立て並べその上に同じ樹枝を渡して屋根のある雪よけ廊下のやうにし渡した樹枝の上に、重量三四貫程の石が三個乗せてあつた、下には藤蔓にしばつた餌がついてゐて熊が餌に食ひつくると上の石が落ちる様な仕掛になつてゐるのであるが、近年こんな原始的な存在を珍らしく見たと、新潟市赤坂町三、谷澤尙一氏)



一 彫材製漆の模造品を製作するの已むなきに  
 至つた。之れが木彫堆朱堆黒の始めである。  
 昭和五年の秋、村上工藝會及び村上木工組合聯合會主催の漆器競技會を郡產業館に開く。之れは小規模の會であつたが内容は何れも舊面目を超越した創作的意匠の下に時代の趨勢に伴はんとする有意義の實質を具備せるものであつた。漆器は郷土粹を保存せる堆朱堆黒に依然として傳來の誇を示せる以外に、彫刻、朱漆共に劃時代的作品の斬然頭角を現はして居るのを看取せられた。以て最近の傾向を察知せられるだらう。  
 加之、小野爲郎氏は版畫の研究に没頭し、堆朱堆黒の刻に、彩漆に一新生面を開かんと努力した結果、創作的作品の産出を見るに至つた。

なるこの爲め、迅速に且つ多數の需要を充たす事が出来ない等の不都合なる點から彫材製漆の模造品を製作するの已むなきに至つた。之れが木彫堆朱堆黒の始めである。  
 昭和五年の秋、村上工藝會及び村上木工組合聯合會主催の漆器競技會を郡產業館に開く。之れは小規模の會であつたが内容は何れも舊面目を超越した創作的意匠の下に時代の趨勢に伴はんとする有意義の實質を具備せるものであつた。漆器は郷土粹を保存せる堆朱堆黒に依然として傳來の誇を示せる以外に、彫刻、朱漆共に劃時代的作品の斬然頭角を現はして居るのを看取せられた。以て最近の傾向を察知せられるだらう。  
 加之、小野爲郎氏は版畫の研究に没頭し、堆朱堆黒の刻に、彩漆に一新生面を開かんと努力した結果、創作的作品の産出を見るに至つた。

### 第二章 村上産業上の地位

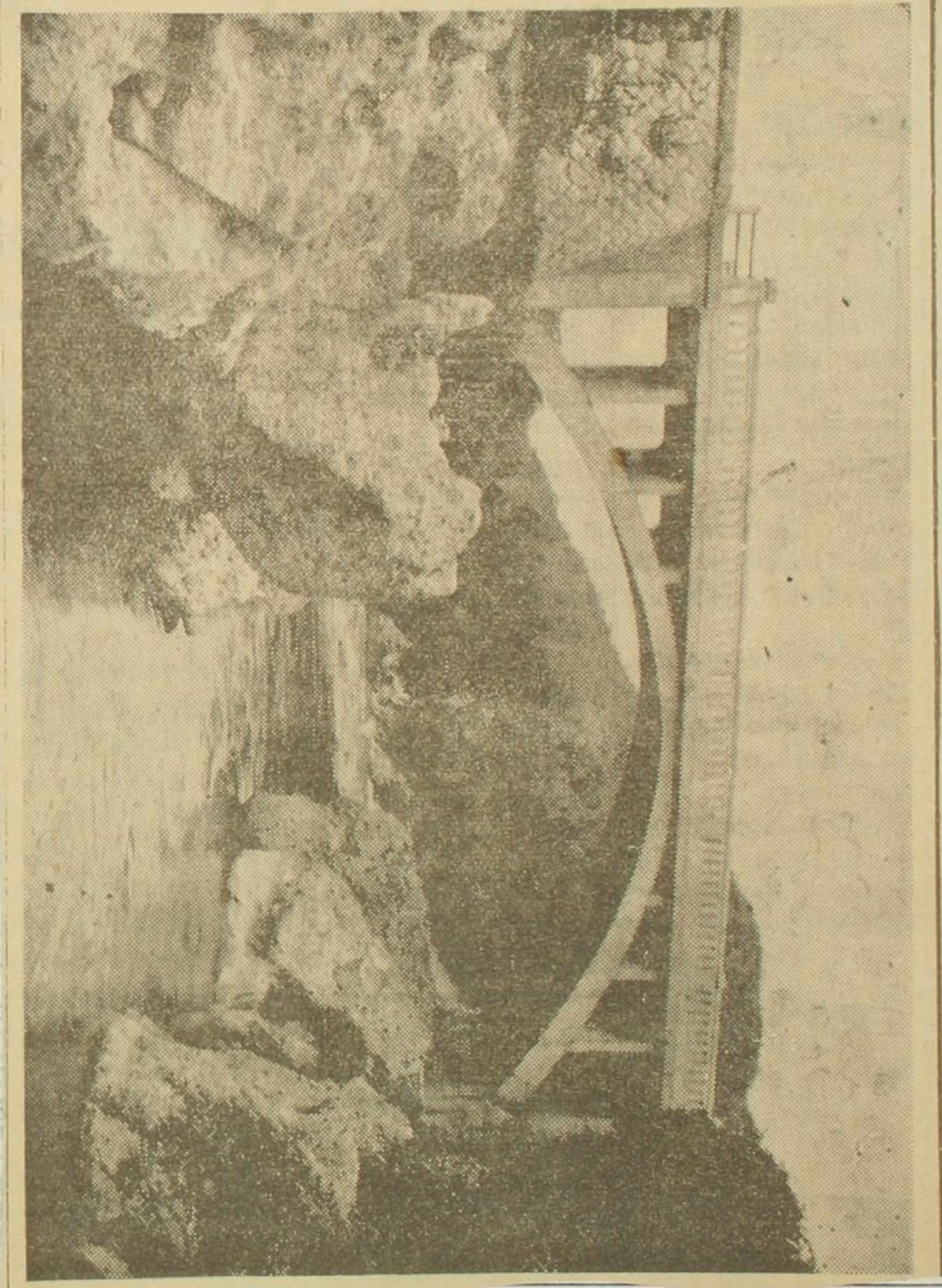
村上の諸産業に就いて其の生産額を擧ぐれば次の如くになつてゐる。

種 目	生 産 額	水 産 業 計
農 業	一、一〇八、八九圓	五、三六圓
工 業	一一七、三三圓	一、三二、五三圓
種 目	生 産 額	
各種工産物	七三、七二〇圓	七六、五〇〇圓
農用機械	六〇、四五〇圓	六三、〇〇〇圓
ス キ ー	一〇、〇〇〇圓	三四、一八圓
清 酒	二四三、七四〇圓	三、八〇〇圓
生 糸	三九一、四九〇圓	一〇五、三六圓
		四九、七三〇圓

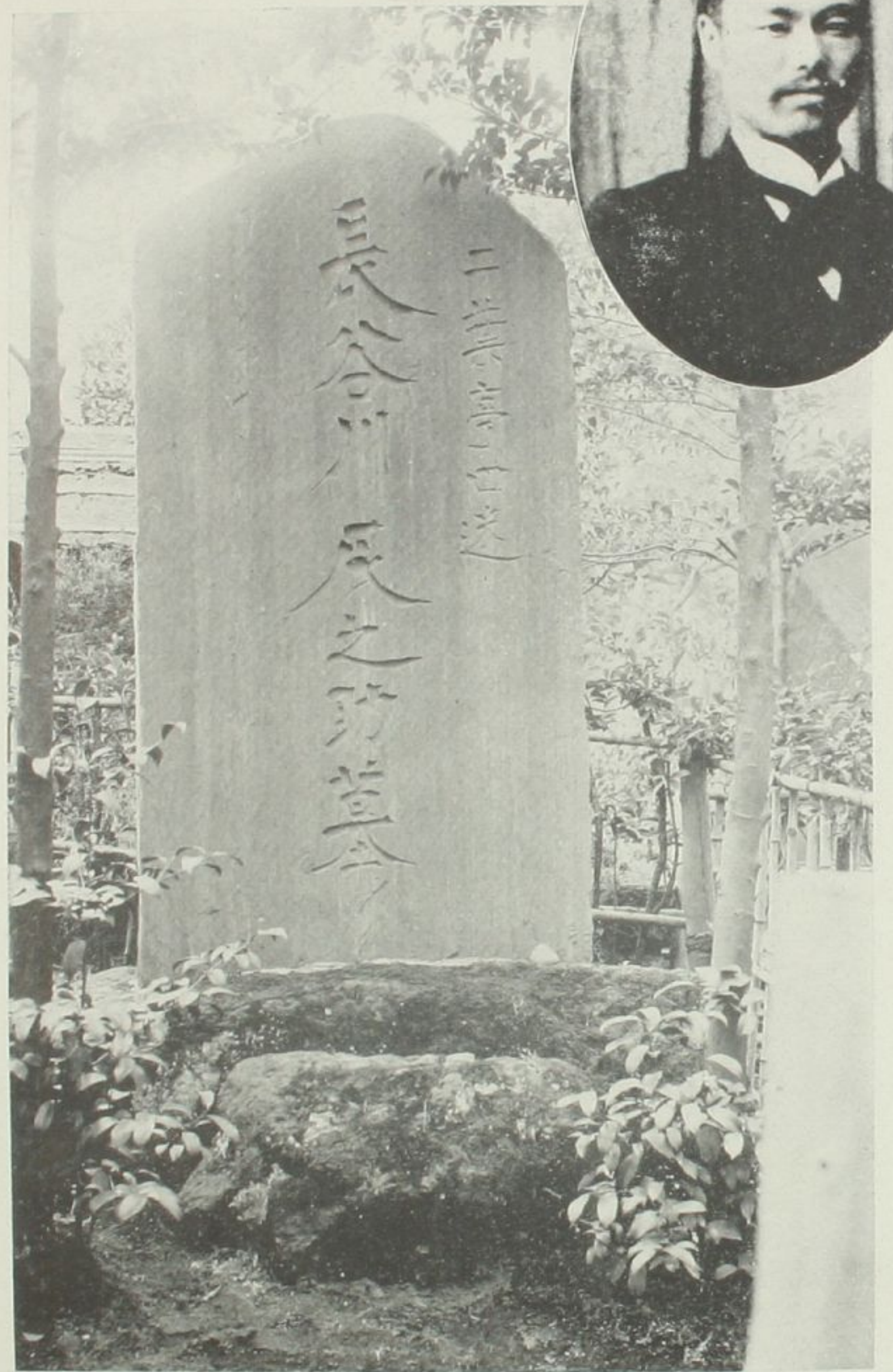
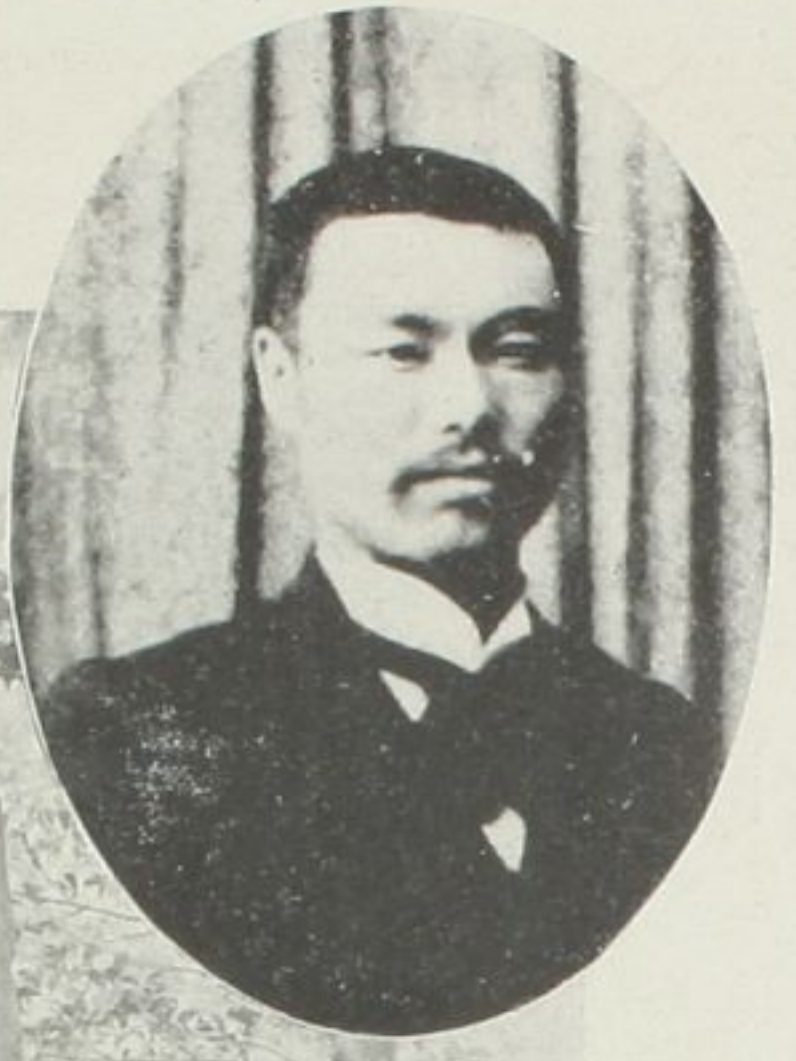


北條中條胎内川所見

涼風湧之 中條胎内川所見



東京府



墓の共と亭葉二川谷長





森 鷗 外 と 其 の 墓



